

Tangolandia

秋
2012

日本タンゴ・アカデミー会報



目次

実り多い2012年	島崎長次郎	2
わたしのひそかに愛するタンゴ メレニータ・デ・オロ	高場将美	3
東京のタンゴ・スポット回想(新企画第1回)	米山瑛子・島崎長次郎	7
想い出のタンゴ喫茶巡り 第6回「神戸キャンドルほか」	山本雅生	11
私の愛聴盤(第2回)	清水昭博	14
父とオーディオ	大岩 功	18
小さなレコード・コンサート インタビュー山本久子さん	山根 洋	21
私とタンゴ 出合いに導かれて	多村知子	25
フリアン考	櫻井征夫	29
メンサヘ考	齋藤富士郎	32
タンゴ・ダンス アジア選手権決勝(7/8)	宮本政樹・大澤 寛	36
タンゴ・ワセダ 練習風景取材(7/11)	脇田富水彦・大澤 寛	38
2012年東京タンゴ祭(7/14)	宮本政樹	39
小松亮太 El Tango 公演を聴いて(9/8)	大澤 寛	43
「我が命のタンゴ」を観て	佐藤 進	45
アルゼンチン旅行記	大久保江梨	46
書評 タンゴの革命児 没後20年ピアソラ	齋藤富士郎	49
新・訳詞コーナー La número cinco	大澤 寛	51



実り多い2012年

島崎 長次郎



暑い夏がようやく過ぎました。会員の皆様にはこの夏を如何お過ごしでしたでしょうか。

暑さに悩まされながら見聞きする心配なことや腹の立つニュースが沢山ありましたし、今もあります。遅々として進まぬ東北大災害からの復旧、原発、領土、増税、子供のいじめ、産業空洞化や貿易立国への不安など、問題は後を絶ちません。

それはさて置きまして、ピアソラ没後20周年に当たる今年は、わが国のタンゴ界でもとても実りの多い時間を過ごして来ました。当会の二つの機関誌も、精力的に報告記事を掲載しております。2月の「ファビオ・ハーゲル・セステートを聴く」、「アルゼンチン・デイ レポート」、4月の「東京・春・音楽祭から」、5月の「昭和 そして今」、6月上野奏楽堂「巨匠パブロ・シーグレルの夕べ」、7月「ダンス アジア選手権決勝」、「東京タンゴ祭2012」、9月「El Tango」、「アルゼンチン・タンゴ真鶴上陸」等々が報告されていますが、到底全部をカバーし切れておりません。いちいちお名前を挙げることをいたしません、それぞれの企画をされた方々や出演者の皆様に深い敬意を表します。若手の演奏者・歌手の成長・充実に加えて、まだまだ全盛期を思わせる壮年世代の方々の活躍にも目を見張るものがあります。

そして、我がNTA 主催の第2回「ミロンガ」が10月8日に開催されました。新会場に“いきいきプラザ一番町”のカスケード・ホールを選び、生演奏は小松真知子（当会会員）とタンゴクリスタル、ダンスのデモはギジェルモ・ボイドと間々田佳子（当会会員）を迎えました。昨年の経験に照らして様々の改善を加えた結果、162名の参加を頂き楽しい午後のひと時を過ごすこと



ダンスのスペースも鑑賞席も余裕のある新会場

が出来ました。当日参加頂けなかった地方在住の会員の皆様のために別途録画をお届けすることも検討しております。

今後ますます皆様との交歓の機会を増やすべく努力を続けて参りますので、今後ともご支援のほどをよろしく願いいたします。

(2012年10月9日記)



わたしのひそかに愛するタンゴ

メレニータ・デ・オロ Melenita de oro



高場 将美



『メレニータ・デ・オロ』
楽譜表紙——作詞者名が間違っている。

この曲の題名の訳はむずかしい、というか、不可能だ。そこで、どうせ架空の女性のあだ名なので、スペイン語『メレニータ・デ・オロ』のままが無難なように思う。

メレニータとは、melena ということばを可愛く言ったもので、その「メレーナ」は、元来はライオンなどのたてがみのこと、転じて人間の長く垂れた髪をいうと、西和辞書に書いてあった。辞書のせいにはしてはいけないが、わたしはずいぶん前に「黄金の垂れ髪」と訳しておいた。後に「長い金髪」とした人があって、それでもいいなと思った。

でも、楽譜の表紙を見てわかるように、彼女の髪はとくに長くない。そこで思い当たったのだが、このことばには「長い」とか「垂れた」という形容詞を付ける必要はないのだ（少なくともアルゼンチンの用例では）。メレーナとは、単に、女性の（ショートカットではない）「髪」のことだ。男性なら「長髪」と訳すべきだろうが。

わたしがこの曲を知ったのは、今から50年ほど前のことだ。神田の古レコード屋で、すでに大好きだった歌手フーリオ・ソーサの入っている小さなレコード（2曲入り）を2枚買った。正式に言えばロトゥンド楽団のレコードで、ソーサの片面には、もうひとりの専属歌手であるフロアール・ルイス Floreal Ruiz (1916 - 78) の歌が入っていた。そこに『金髪の娘』と題された、この曲があったのだ。サエない題だと思ったけれど、今にして思えばけっこう正しい訳だったのだ。歌詞カードが付いていて（日本語訳はなし）、それを読んで、わたしはワクワクして、すてきな短編小説でも読んでるような興奮をおぼえた。

といっても、スペイン語がぜんぶ読み解けたわけでもない。全体はよくわかっていたつもりだけれど……。

「わたしのベッドの枕に残っていた彼女の金髪の1筋が……」というような色っぽい情景が目には浮かんで、20才そこそこのわたしは興奮していた（大笑い）。でも、ずいぶん後になって、スペイン語がより正しく感じられるようになってから、よく聴いてみると、似たようなことばはあるが、歌詞はそんなことは言ってない！

この曲は、1922年の、キャバレーで働く女性を主人公にした劇『ミロンギータ Milonguita』

のために作られたもので、作詞者はその劇の脚本作家だったサムエル・リンニグ *Samuel Linnig* (1888 -1925) である。彼について、またこの劇について、当アカデミーの機関誌『タンゲアンド』の最近号「タンゴ作家列伝」に書きましたので、ご参照ください。

短編小説のような歌詞を、今回は全曲ご紹介しよう。出版されたのではなく、フロレアル・ルイスのうたっている歌詞にした。全体的に、そのほうが、はるかに良いからである。構成・筋書きは同じだ。

En la orquesta lloró el último tango, / te ajustaste nerviosa el antifaz / y saliste conmigo de aquel baile / más alegre y más rubia que el champán.

(オルケスタで最後のタンゴが泣き終わった。きみは神経質に仮面を直した。そして、わたしといっしょにあのダンスパーティから出た、シャンペンよりも楽しげに跳ね、シャンペンよりも金色に輝いて)

このあと、男が話しかける。彼女がピエロの仮面をかぶっていたことが、ここで聴くものにわかる。いわゆる行きずりの出会いだったことも。

¿Cómo se llama, mi Pierrot dormido?, te pregunté, y abriendo tus ojos, / con los labios sonriendo, respondiste: / “A mí me llaman Melenita de Oro . . . / ¡Si viera por la vida! . . . ¡Estoy tan sola! . . .” / ¿Recuerdas? Parece que temblabas / con ganas de llorar, tu primer beso . . . / y ¡ya mentía tu boca, la pintada!

(あなたのお名前は？ わたしの眠っているピエロさん——と、わたしははずねた。すると、きみは両目を開き、くちびるに笑みを見せて、答えた。「人はわたしを《メレニータ・デ・オロ》と呼んでます。だれもわかってくれない！ こんなに、ひとりぼっちのわたし！」覚えているかい？ きみは泣き出したい思いにふるえているようだった。きみの最初のキス……そして、もうきみの口は嘘をついていた、きみの紅を塗った口は！)

ここまでが第1部。次いでリフレーンになる。この部分の後半は、フロレアルは、最後にもうたって、クライマックスにしているのです、ここでは前半だけ紹介しよう。

Melenita de Oro, / tus labios me han engañado, / esos labios pintados, / rojos como un corazón . . .

(メレニータ・デ・オロ、きみのくちびるは、わたしをだました。あの紅を塗ったくちびる、赤いハート(心臓)に見えるくちびる……)

これから第2部になる。わたしが誤解していたのが、ここですね！ 近年の映画だと、ここは激しいベッド・シーンになるのだが、この時代では、しかも多くの人の前でうたうタンゴでは、そういうことはすべてカット。時間が飛んで、場面は同じ男の部屋だが、彼は、そこにいない彼女の幻に呼びかけている。

En la almohada, como una mancha rubia, / tu ausente cabellera creo besar / y mis ojos te ven (¿ya no te acuerdas?) más alegre y más rubia que el champán. /

Dejame; no, no quiero tus caricias; / me mancha la pintura de tus labios . . . / Todavía están frescos de otra cita! / ¡Si se ve que recién los has pintado! / Apágame esa luz, cierra la puerta . . . / No quiero verte más, mujer odiada, / dejame solo, solo con mi pena . . . / ¡No quiero verte más! ¡Vuelve mañana!

(枕の上の、金色の染みのような、そこにいないきみの髪に、わたしはキスしていると信じている。そして、わたしの目には見える——きみは覚えているだろうか？——シャンペンよりも楽しげに跳ね、シャンペンよりも金色に輝いていたきみが。

わたしを放っておいてくれ。いやだ、きみの愛撫はほしくない。きみのくちびるの紅が、わたしに染みを作る……そのくちびるは、ほかの出会いをしたばかり！ 今の今、塗り直したばかりだとすぐわかる！ その明かりを消してくれ、ドアを閉めてくれ……。もうきみには会いたくない。きみは憎い女。わたしをひとりにしてくれ、わたしの悩みとだけいっしょに……。

もうきみには会いたくない！……でも、明日は、もどってきてください！)

フロレアルの演出では、ここでリフレーンの後半の部分だけうたって終曲。

Merenita de oro, / no rías, que estás fingiendo, /

no rías, que estás mintiendo / que anoche lloró tu corazón.

(メレニータ・デ・オロ、笑うのをやめなさい、きみは楽しいふりをしているだけ。笑うのをやめろ、きみは嘘をついているのだ、ゆうべ、きみの心は泣いていたことを)

この曲の最初と最後の部分の楽譜をご紹介します。出版楽譜は随所で大事な音が間違っている。ここでは、フロレアルのうたっているように書いた。

フロレアル・ルイスは、若いころから歌っていたが、1943年にアルフレード・デアンジェリス楽団の専属歌手になって広く知られ、1年後にはアニバル・トロイロ楽団に引き抜かれた。この『メレニータ・デ・オロ』は最初から得意曲だったらしい。デアンジェリス楽団でもうたい、録音するはずだった。でも彼がいなくなったので、せっかくの編曲を無駄にしないために、デアンジェリスは、カルロス・ダンテにうたわせて録音している。

フロレアルは、1948年にフランシスコ・ロトゥンド *Francisco Rotundo (1919 - 97)* 楽団の専属歌手になった。この人は、父親がアルゼンチン屈指の製紙会社の創始者で、本人は家業を継ぐかたわら、趣味の音楽（というかタンゴ）でも生きたくてタンゴ楽団をつくった人だ。子どものときからピアノを学び、プロ音楽家の資格はあったが、自分は指揮するだけにして、音楽監督として、優秀なアレンジャー・第1バンドネオン奏者であるティティ・ロッシ *Tití Rossi (1916 -*

85)をやとって、立派なオルケスタ・ティピカをつくった。ティティは、エクトル・バレラ楽団の編曲を（バンドネオン変奏も含めて）全部書いていた人である。フロレアルの歌の間にも、金属的な音色の、細かい音のメカニクな、ティティならではのバンドネオン演奏スタイルが聴ける。ときどき、うるさすぎるんだけどね（失礼）。

でも、音は良くても売れない。そこでスター級の歌手を専属にして人気を高めようと、フロレアルを入れたわけだ。彼に破格の高給を払ったばかりでなく、トロイロと、その専属レコード会社であるRCAビクトルに、かなりの賠償金

を出した。そしたら、この楽団は1ヶ月に3回しか仕事が無かったのが、20回に増えたという！

フロレアルはすごい！ ロトゥンドは大富豪(?)だから、楽団経営が大赤字なのはいっこうにかまわなかったけれど、聴いてもらえないのは悲しいですよ。

わたしは、ただ1度、フロレアルを生で聞いた。1970年代の初め、ブエノスアイレスの中心街の一角に、サーカスのようなテント小屋の仮設劇場（某政党の大衆にアピールする政策の産物）で、折りたたみ椅子が数十席あるようだったが、ほとんどが立ち見で、超満員（500人以上?）。なにしろ格安料金で、民衆のスターたちを聴けるのだ（わたしの見た日は、フロレアルと女性エルバ・ベロンが看板だった）。客層はほとんど、当時は「中年」と呼ばれた40代の男女で（夫婦連れも多かった）、フロレアルが登場すると、おばさんたちも、キーキー声を上げて歓喜のエールを送っていた。おじさんたちは「ブラーボ！ カベソーン（頭でっかち）！」と、どなり声を発する……初めて見たが、フロレアルの頭は、ほんとにデカイのである。

フロレアルの歌は、客受けを狙って、あの絶妙のフレージングに裏声もまぜて、俗悪におちるギリギリのスタイルだった（彼はこのスタイルでは、録音していない）。『メレニータ・デ・オロ』は、大衆には人気がないらしく、始まって拍手が起こらなかった唯一の曲だった。『地獄の底までHasta el infierno』や『パシオナルPasional』その他は大歓声で、歌が聞こえなかったほどなのに……。

でも、フロレアルは、この曲をうたいたかったんだよね。わたしも聴けてしあわせでした。低俗なスタイルにも、ぴったり合っていた。

……この曲の作曲者ヘローニ・フローレスCarlos Alberto Geroni Flores (1895 - 1953) も大天才で、タンゴ界の体制にはまらなかったボヘミアン音楽家として、詳しくご紹介したいけれど、今回はスペースがない。ごめんなさい。



ロトゥンド楽団のCD。写真は指揮者ではなく、歌手フロレアル。

東京のタンゴ・スポット回想 (1)

京王プラザホテル「コンソート」(新宿)

● 米山瑛子

○ 島崎長次郎 (聞き手)

○ 今から2-30年前ころの東京には、ファンに知られたタンゴ・スポットがいくつかあって、それなりに賑わいをみせておりました。米山さんは通訳を兼ねてそれらに出入りされ、勧められるままに歌の道に入り、遂にはステージに立つまでになられたわけですが、今回からそれらについて楽屋裏からの視点で語って頂こうと思います。最初は新宿の「コンソート」(1986-88)ということで、まずはその出入りのきっかけからお話下さいませんか。

● それは今から25年ほど前のことで、来日した歌い手のビルヒニア・ルーケのコンサートが赤坂の草月ホールで開かれたのがきっかけでした。リーベル・トリオ (Pf=エンリケ・クッティエニ、Bn=ウーゴ・パガーノ、Gtr=ルイス・ベレイラ) の好伴奏を背景に、それは見事な歌唱で魅了されてしまいました。それでももっと聴き続けたいとおもっていたところ、このグループが実は新宿のタンゴ・スポットとして知られ始めていた「コンソート」に出演していることがわかり、早速聴きに行ったのでした。ルーケは持ち



ビルヒニア・ルーケ

前のサービス精神で、ホールの場合とは一味違う演出で客席を廻りながら、客にタバコの火をつけてもらい、それを吸いながら得意な「ラ・クンパルシータ」を歌うのです。男の背広姿で肩にはボンチョをかけ、男の帽子をかぶり、それは実にいなせなスタイルで、ときには拳を振り上げながら、情熱をこめて男っぽく、そして声をやわらげてグッと女っぽくと、ルーケ特有の歌唱で聴衆を巻き込んでいったのでした。後で聴いた話によるとこの帽子はアスセナ・マイサニがかつて舞台などで愛用していたもので、彼女からプレゼントされたものとか、…。とにかく全てが見事でした。

○ ルーケは昭和62 (1987) 年と平成2 (1990) の2回来日した記録が残っていますが、多分その最初の頃でしょうね。舞台上で鍛えられた演技力で人を惹きつける点では抜群のものがあります。先の映画「伝説のマエストロ」でも健在ぶりを発揮していましたね。

● 間六三（この後に開店する赤坂の「ノスタルヒアス」のオーナー）さんのお話によると、当時の「コンサート」のアーティストは全て私がアルゼンチンから連れて来たもので、ルーケもその一人だと言っておられました。その際の伴奏はリーベル・トリオでどうかと伝えたら、ルーケは“私は大歌手だからそんな無名のグループでは歌えない”と当初は言って来たそうです。そこで間さんは、一度ともかく聴いてからにしたら、と説得し、聴かせたところすっかり気に入ってしまい、ついに来日して一緒に活動を始めることになったのだそうです。以降、バンドネオンが必要なときはウーゴ・パガーノを指名するようになったといいます。以来パガーノは再々来日しているのはご存知の通りです。

○ このトリオと組んで歌ったルーケのシーンは、我が国のテレビでも放映されたので多分ご覧になった方もいらっしゃるでしょう。とても格好良かったですね。

● ここで次に私が見たのは、やはりリーベル・トリオの伴奏で進行した歌と踊りで、歌はマリア・ガライ、そして踊りはロス・バレンスエラ（リリアナ&ホルヘ）でした。マリア・ガライは小柄な女性でしたが、声量も豊かな上にすごくパンチのある歌い方で店内を圧倒するような力を感じました。私は間さんからこれらの人が喜ぶからと言われ、時間の許す限りここに出かけ、いつもショーの合間に出演者が休む中二階に座ってショーを観ていました（いつも無料で、）。そして街の買い物に付き合ったり、ダンスを習ったり、またスペイン語の練習相手になって貰ったり、楽しい時間を過ごすことが出来ました。ダンサーのロス・バレンスエラとはよく買い物に行ったり食事をしましたが、リリアナはとても優しい女性で、マテ茶が好きだったのでよく飲みながらアルゼンチンの話を聞かせてくれました。「コンサート」の出演者は同じ京王プラザホテルの部屋に寝泊まりしていましたが、リリアナはポータブルミシンを持っていて、街で買い求めた布で踊る時のドレスを作って着ていました。彼女の話によると、本国では好んで服を作る人が多いので沢山の型紙を店で売っているのだそうです。この夫婦はとても仲良しだと思っていましたが、帰国して子供が生まれてから間も無く離婚してしまったそうで、何とも残念に思います。

○ このあとに当時話題のマエストロの率いる楽団がやって来たのでしたね。

● そうです。入れ替わってピアノのオマル・バレンテの率いる楽団が到着したのです。バレンテは至って気さくで明るい人柄で、人にも好かれました。歌は前半の1ヵ月半は著名な詩人エンリケ・カディカモの愛娘モニカ・カディカモ、後半はクラウディア・モリーナ、それに踊りはノルマ&パンパ、早速翌日に聴きに出かけました。それぞれ期待にたがわぬパフォーマンスぶ



「コンサートにて」左から
オルランド・トリポディ 米山 オマル・バレンテ

りで堪能させられましたが、とりわけバレンテのピアノは聞きしに勝る腕前で、甘さの中にも切れの良さがあり、同時に卓抜したテクニックを見せながらもしみじみとした味わいがある、客受けはともかく良かったと思います。

○ バレンテは確か2回目の来日の時ですね。その一行が米山邸に大挙して押しかけて来たというはその頃ですか、、、。さぞ大変だったでしょうね。

● でも楽しかったですよ。彼らはオフの日に是非“アサード”をしたいと言うので、我が家に来て貰うことにしたのです。友人なども交えて15-16人位になったでしょうか、ともかく賑やかで、手分けをして肉屋に行って牛肉10キロ、鶏2羽（鶏冠と足の付いたもの）、チョリソ15本、肉屋さんでは何が始まるのですかとびっくりしていましたが、、、。それから八百屋さんと言



バレンテ一行の米山宅でのアサード風景

う具合で、サラダの材料を調達し、ポリバケツ一杯（レタス、トマト、玉ねぎ）のサラダ作り、さらにワイン2箱にビールなど、朝から夜までてんでこ舞いで準備し、飲み、食べ、おしゃべりにもかく大忙しの楽しい一日でした。でも感心したのは踊り手のパンバがとても料理上手で、彼は専らアサード係りでよくみんなの面倒をみてくれました。それにしてもメンバーの旺盛な食欲と、底抜けの陽気さには圧倒され、つくづく血の違いを痛感させられましたね。バレンテは1973年のフランチャーニ=ポンティエル楽団来日の折に、バンドネオン奏者として来ていますが、陽気な半面、とても繊細な神経の持ち主で、私も何曲も譜面を書いて頂きましたけれど、それだけに編曲にかけては卓抜した腕を持っておられたのだと思います。

○ そのバレンテも、惜しいことに2008年の2月2日に亡くなりましたが、歌伴のアレンジは特に定評があり、わが国でも御世話になった歌手さんが多いのではないのでしょうか。

● バレンテ楽団の後半の歌手モニカ・カディカモが唄う際は、父親の名作詞家エンリケ・カディカモとネリー夫人が楽屋に現れ、私に“モニカはいいだろう。どう思う？”と親ばかり100%のありさまでした。当然モニカのレパートリーには父親の作品が多かったですね。モニカはダンサーのノルマとよく私の家に遊びに見え、いろいろなお喋りをして楽しい時間を過ごしましたが、やがて帰国する際、父親のエンリケは私に“色々お世話になって有難う”と言って、色紙に気持ちを書いてプレゼントしてくれたのを今も大切に持っています。帰国する日には成田まで見送りに行き、名残を惜しまました。帰国したモニカはサッカー選手と結婚して出産したそうですが、その後子供は亡くなったとの噂を耳にし、とても切なく残念に思いました。

○ さて、次の来日グループと言うと、誰だったのですか、、、。

● 次のショーは、カディカモの推薦と言われる、アルベルト・ディ・パウロの楽団でした。歌手は豊かな歌唱力を持つブランカ・ムーニーで、楽団編成もここでは通常3-4名を増やして6名(ピアノ、バンドネオン、バイオリン、ビオラ、チェロ、ベース)。その代りダンスはなしでしたね。ディ・パウロはご夫人ともどもなかなかエレガントなお人柄で、



モニカ・カディカモ 間六三 エンリケ・カディカモ

カディカモのお気に入りであるのがわかる気がしました。お好きな曲はトロイロの「マリア」とか。ブランカ・ムーニーは派手さはないものの、しっとりとした歌唱で、どちらかというと玄人受けする歌手の印象を受けました。彼女はマテ茶が好きで、よく彼女の部屋に誘ってくれました。或る日コンソートのテーブルに座って彼女の歌を聴いていると、急に私のところへ来て“客席に誰もいないようで、ちょっと眩暈がした”と言うのです。ショーが始まると客席を暗くするのでよく見えないのですが、事実この夜は私を入れてたった3名だったので気の毒になり、席を立つことも出来ず最後まで居てあげました。そのムーニーも帰国後間もなく亡くなってしまい、本当に惜しいことをしました。なんでも“自分の歌っている姿を見たいので、ぜひビデオを送ってほしい”と間さんに依頼があって、すぐに送ってあげたそうですから、多分それを見て日本の思い出に浸りながらあの世に旅立って行かれたことでしょう。私にとっても忘れ難い歌手の一人ですので、あらためて心からご冥福をお祈りしたいと思います。

○ 貴重なスポットでしたが、経営的にはなかなか大変だったのでしょうかね。

● そのようで、だんだん客足が減って経営が成り立たなくなったのでしょうか。このディ・パウロを最後に閉店になってしまいました。こんな素敵なホテルで、施設も整い、本場アルゼンチンの一流のアーティストのタンゴが聴けるというのに、、、。2年間の活動も、とにかくここで終符が打たれてしまったのは本当に残念でなりませんでした。

○ 今日はいろいろ有難うございました。次回は赤坂の「ノスタルヒアス」の予定です。またよろしくどうぞ。

(2012.9.11 収録)

思い出のタンゴ喫茶巡り(第6回)

神戸に在った「キャンドル」 他のお話し



スケッチ：神戸の角井さん

山本 雅生

神戸の街にはかつてタンゴを聴くことが出来た喫茶店が4店在りました。

その中で最も有名なお店が「キャンドル」でした、「タンゴランディア2007春号」で「60歳からの再出発」と題して、突然「キャンドル」の事を書かれた会友の陳さんの記事で大いに驚き「2007秋号」で若かった頃会友の上田さんや、神戸の仲間達と共に「なつかしのタンゴ喫茶キャンドル」としてプグリエセの一行とカンバレリー一行と

のバカ騒ぎの写真を添えて「キャンドル」の思い出を投稿させて頂きました。

処がどう云う訳か今年の(2012)初夏になって、編集部から連載中の「思い出のタンゴ喫茶店」に神戸にあったキャンドルを書いて欲しいとの依頼が舞い込んで来たのです。編集長の大澤さんに以上の事をお話しをして、同じ事がダブるので!とお断りをしたのですが、シリーズ「思い出のタンゴ喫茶」に掲載したいのでどうしても書いて頂きたい!との強いお話しが有ったので再度お目汚しをさせていただきます。

前置きはこれ位にして、「キャンドル」がどうして出来たのか?と云う起源について当時同じ様に通った数名の仲間に色々聞いたのですが、も一つしっかりとしたお話を聞き出す事は出来ませんでした。神戸と云う街(旧市街)は南北が数キロメートルしか無い東西に細長い街で、その中心線に当たる処を旧国鉄(現JR)の東海道・山陽両本線が高架線で貫いて居ます、現在神戸で最も賑わう繁華街は三宮駅から西へ元町駅に至る約1kmの間で、高架線の南側がサンライズ通り、北側がサンセット通りと呼ばれています。

阪急三宮駅西口とJR元町駅の間を南北に北野町から旧居留地迄貫いている通りを「トアロード」と云い観光客で賑わっていますが、そのサンセット通りとトアロードの交わる北東の角に「キャンドル」は在りました。陳さんのお話によれば以前は武田君「啓ちゃん(本名陳)」のお姉さんの経営する「コーナーハウス」と云うお店だったのですが昭和36年、かのF・カナロが来日した時武田君がキャンドルとお店の名前を変えて「タンゴ喫茶」を始めたと云う事の様です、丁度その頃神戸高速鉄道と云う鉄道会社を作って、在神4私鉄の線路を結び、相互乗り入れをし利便性の向上を図ろうと云う計画が具体化し昭和37~38年頃阪急の高架線の延長のため立ち退き移転をして現在も残る新店舗になったのです。旧店舗は入って左側にカウンターが有り、アイドル「市末君」がレコードを掛けて呉れたのです、「市末君」は大変温和しく、良く気の付く優

しい人で何時もレコードを掛ける時は湿ったガーゼで丁寧に盤面を拭いて掛けて呉れました、又お客さんの好みを良く覚えて居て、注文をしなくても各人のお好み楽団・お好み曲等を選別して呉れたものです、私も昨年までは年賀状の交換などを通じてお付き合いも有ったのですが、このレポートを書くについて、電話をしたのですがつながらず、住所地のマンションに行ってみますと空き家になっていて、逢うことが出来ず案じて居る処です。

当時私達「神戸ボルテニア音楽同好会」はセンター街の星電社の文化サロンでレコードコンサート等の活動をしていましたので「キャンドル」は仲間の寄り集まる「実家」の様な処でした。新店舗は鉄筋地下1階地上3階建てで2階以上は鉄板焼きステーキハウスになっていました、その2階に上がる階の壁には火縄銃・大筒等の骨董品が並べられ自慢の様子でしたが、前出の陳さんのお話によればその支配人の「啓ちゃん」こと武田君は大変明るく豪放磊落な人で、お客さんとも皆兄弟の様に親しく接して居ましたが、元々「ボンボン」育ちのため無駄遣いも多く浪費が凄いのでお母さんが怒ってしまい、昭和55年頃閉店をしてしまった様です。お姉さんのお話によれば中古のベンツを買ったのは良かったのですが、故障ばかりで、新車を買うより余程高いものになった、と怒っていたそうです。

N T Aにも一時期在籍をした事のある「西浦さん」が主宰をする「TANGOシンポジウムKOBЕ」と言う同好会が昭和46年1月から「キャンドル」を根城に発足をし、昭和55年1月の例会迄例会をしていましたが、以上の様な訳で「キャンドル」が使えなくなり、会場を他の集会場などに求める羽目になった様です。

「キャンドル」の跡に入った花隈の富貴が暫く喫茶店を営業して居た様ですが、その後に入った「りんりんハウス」と言うテレクラ店は平成12年3月2日早朝に放火事件が発生し4名の尊い命が奪われると言う事件が有って耳目を集めた新聞種になりました、現在は不動産屋さんが営業をしています。

もう一つのタンゴ喫茶と云えば中央区江戸町と云う栄町2丁目（南京町中華街の南楼門）の有る処から南に約100メートルの処に「コットン」と言う古いタンゴ喫茶が有りました、店内はカウンターとテーブル席合わせても約10名そこそこの小さなお店でした、店内の壁には「別車画伯」の絵が飾られて大変レトロな雰囲気漂う海岸通りにはピッタリのお店でした、店主は米谷さんと云われる小柄な方で県工の先輩と云う事もあってよく通ったものです、ドアを開けて入った正面にガラードのオートチェンジャーが有って、数枚のLPが自動的に交換されながら演奏されていました、リクエストは全く無くその時重ねてあるレコードをそのまま聴くと云うスタイルでありました。御主人は何となく腺病質で弱々しく小さな声でお話しをしておられました。



昭和25年にオープンされた古いお店でタンゴ喫茶店と云うよりは、土曜半ドン日祭お休み、平日も夕方早く閉店と云う典型的なビジネス街の憩いの場所と云った雰囲気のお店でした。平成3年に奥様に続いてマスターも亡くなられて、あっけなく閉店となり現在はブティックになっています。

もう一軒昭和61年1月にオープン、昭和63年6月に閉店と云う、営業期間1年半と云う短期間、神戸三宮そごう百貨店の裏に咲いた「ブエノスアイレス」と云う名前を聞いただけでタンゴファ

ンなら「キラツケ・最敬礼」をしてドアを開けなければいけないお店がありました。

お店のママは小関さんと云われる「楚々とした美人」で御主人のお仕事の関係で約3年彼の地に住んでおられた、との事で開店をされたとの事で、仲間のMさん・Gさん等がよく通っていた様です、お店にはかの「京谷弘司」さんも来られてバンドネオンの演奏をされたとの記録も有る様ですが、「ロコ・デル・タンゴ・デ・コーベ」の為に咲いたあだ花は散るのも早く、御主人のお仕事の関係で東京に転居する事になり、閉店のやむなきに至ったのです。このお店の事では後日談が有り、タンギート木田さんのツアーで聖地に渡り平成2年にそれも御主人の会社の保養施設で有った「神戸北野阪」と云うレストランに「ホルヘ アルドゥー キンテート」を招き「すきやき・タンゴショー」を開催、翌平成3年11月には私共の「神戸ポルテニア音楽同好会」の主催でポートアイランドに有った「ゴーフル ポートピア88ホール」で盛大なコンサートを行いました。



その時アルドゥーに同行をして来神された埼玉県ふじみ野市の水野さんとは今も交流をさせて頂いています。

さらにもう一軒私は全く知らないのですが、上田さんのお話に依りますと、戦後神戸の三宮・元町付近には音楽喫茶が沢山開店をしどこも盛況でジャズでは「月光」「コペン」等、クラシックでは「ウィーン」等有名で、タンゴを始めて聴いたのは高校生の時（昭和27年頃）神戸元町3丁目海文堂書店とストック洋服店の間の小路を南に入った処に「モッカ（MOCCA）」と云うお店が有るのを知って友人等と行ったそうです、店内インテリアなどウォールナットで統一されて大変格調の高いティールームで、お店のママさん（お姉さん）は和服のよく似合う美人だったそうです。お店にはウエスティング・ハウスの電蓄が有って戦後日本で再発売されたタンゴのSPレコードが沢山有って楽しんだとの事です。（その場所は現在駐車場になっています）

上記の中に出てくる「月光」では昭和32年頃「藤沢嵐子さん・早川真平さん」のライブも有りました。

最後にもう一軒“ドキリ”とさせる喫茶店のお話し、私達の古いタンゴ仲間であるSさんのお話しです。

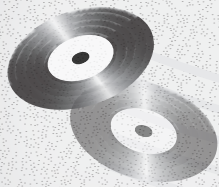
神戸のタンゴ仲間の間では「カフェ・ドミンゲス」と云う曲は大変大事な曲で平成10年10月から平成11年3月迄地元のラジオ局「AM神戸」で芝野さんにメインの司会者になって頂き、神戸・姫路の仲間を始めアストロリコのメンバー等も交えて「深夜のタンゴ喫茶店」と云う番組を展開したのですが、そのテーマ曲がアストロリコの演奏する「カフェ・ドミンゲス」だったので。



阪神電車で三宮から東へ特急停車駅「阪神 御影」駅（有名な酒処灘五郷の中心地）が有ります、その高架下に写真で見えて頂く様な看板を見付けて「何これ!？」と喜んだのは良かったのですが、良く見てみますと何と「カフェ・ド・ミンガス」だったので、「ゲ」と「ガ」の違いで残念との話しでした、因みに今は閉店中との事です。

タンゴファンならでは、早とちりではありました。

以上ダラダラと纏まりの無いお話しで、ページを無駄遣いしました事をお詫び致します。



私の愛聴盤

～第2回～

清水 昭博 (柏江市)

身分を考えれば当然ですが、これまでコレクターになろうと思ったことはなく、ちゃんとしたコレクションをこころみたくは更にはありません。したがって私の入手したSPレコードの大半はたまたま手に入ったようなものでしたから、質量ともたかが知れていました。熱意はともかく研究心と努力の不足を遅まきながら反省しています。「30年代なかばごろまでの演奏」程度の目安だけで、確固たる方針や目的をもって臨んでいたわけではない点はLP/EP盤やCDについても同様です。

数年前になります、所有していたわずかなSP盤を手放しました。住まいが建築後半世紀を経る陋屋のうえ地震対策も講じられないため、マスコミが煽り立ててきた「直下型」などの予想に鑑み、万一の際に少しでもましな場所に置かれているよう望んで、というのが表向きの理由です。枕もとに残しておいてあるSPは、非常持ち出しができるよう数箱だけです。といっても、いざというとき本当に持ち出せるか疑問ではありまして、その際は持ち主と運命を共にしてもらわねばなりません。あろうことか程なく東日本大震災の国難を見ることになりましたが、私どもの地域では揺れはしたものの被害はありませんでした。(難に遭って犠牲となられた方々のご冥福を心からお祈りしております)

かつて私の手元にあったSPの目ぼしいところの大部分は、ありがたいことに格段に良好な状態のレコードからLP/CDに復刻されており、MDやテープへの保存もあるので聴く段にはかえって便利なのですが、多少さびしい気持ちになったり、なんとなく後ろめたさを覚えたりすることはあります。



—故大岩氏を囲んで 1980年頃—
左から島崎、大岩夫妻、松本、清水の各氏
(写真提供：島崎会長)

* * *

無数にあってランキングしようのない私の「好きな曲の気に入った演奏」のなかから、毎日一度は聴きたくなるようなものが時々あらわれます。それらは当座の愛好盤というわけで、私の場合それは食物の嗜好の様相と似ています。何かがとくべつ気に入ると無性につづけたあげく、さすがに食傷気味にはなるのですが、好物の部類に戻しておきます。

当座の好物だった曲・演奏が、いつまでも手離せない座右の「銘盤」に変われれば愛聴盤です。

編集部のお指図があって本誌創刊号に載せられた「私の愛聴盤」から十年以上たった今でも、以下は健在です。

レジェンダ・レア

アディオス・アルヘンティーナ

アラバレーロ

アルマ・デ・パジャーツ

ノーチェ・デ・レージェス

ホアン・ギド

フランシスコ・カナロ

ホアン・マグリオ

ロベルト・マイダ

フランシスコ・カナロ



現在はここへ次のような曲目が加わっています——

トラーゴ・アマールゴ

オルケスタ・ティピカ・ビクトル

順位をつけがたい好演が幾通りもあるので、シリアコ・オルティスを皮切りとしてアコースティックのフレセドまで順繰りに惚れ込みましたが、ティピカ・ビクトルに到って決まりました。朴訥といたいほど実直な演奏は滋味あふれんばかりで、並み居る名演群の一段上に置きたいです。そして原盤はカップルの曲がアウセンシアとは、にわかには信じがたい超黄金の組み合わせですね。こちらもロシタ・キロガの歌唱と並び立つ名演奏。トラーゴ・アマールゴより力感があるようです。聴くときは必ずつづけて再生しますので、両方とも愛聴盤でした。

プロメーサス

オルケスタ・ティピカ・コロムビア

よき時代の雰囲気を感じてゆったりとしたワルツ、などと思っていたら曲の最後の第1主題がものすごいバンドネオン・バリエーションでびっくりしました。サービス満点に聞かせてくれているのはスコルティカッティでしょうか、クラウシでしょうか。大満足です。

プレガーリア

ホアン・マグリオ

はじめて聞いたときから首根っこを抑えつけられたままで、しびれ通しです。マグリオの演奏で私がいちばん好きなのはこの曲と「アレベンティード」のどちらだろうかと今まで迷っています。

フスティージャ・クリオジャ

オスカル・セルバ

罪を犯し自ら縛に就こうとする男の一つだけ心残りは孤児になってしまう娘のこと。やがては母親の死と、手にかけたのが父親だったと知る時が来るだろう。しかし父親を単なる酔いどれの犯罪者とは思わないでいてほしい——「母親がふしだらな女だったか

ら、とおしえてやってください」

曲の最後に**libertina**の一語でサプライズ・エンディングに「けり」が付きクリオジョに於ける正義が明かされるブランカッティのドラマティックな歌に、はたち前のオスカル・セルパが精いっぱい几帳面に取り組んでいます。2年後にはソロイストになる青年であっても、この独白調は荷が重かったかもしれません。オスカルより十何年前、この曲が出来たばかりのころに録音したイタロ・ゴジェツェという人の歌も、同様に生真面目な若い父親の真情吐露として聞こえます。歌い方も似ているようです。

不義をはたらいた妻には夫が天誅を下す（のがクリオジョの掟）という筋立ての歌詞は、さすがにそう矢鱈には無いでしょうが、この**Justicia Criolla**と(2) **Noche de Reyes**そして(3) **A la Luz del Candil**の三曲でタンゴの歌の一隅を占めそうな気がします。前二者はまだ母親の死を知らない子供がいるところが似通っており、(2)と(3)では姦婦姦夫を重ねて成敗、(3)にはかなり強烈な個所もありで、タンゴの歌は時に物凄いですね。

この曲のカナロ版は、この楽団の最良期の数ある名曲名演のなかでもとりわけ好みに合うもののひとつです。歌の伴奏そのままのような前奏で始まりながら演奏だけなのは、エストリビジスタが一節歌うだけでは済ませられないからでしょうか？ ラファエル・イリアルテの作曲したもうひとつの名歌トラゴ・アマールゴを奏するオルケスタ・ティピカ・ビクトルも、同様に歌抜きで大きな感動を呼び起こしてくれます。

ここにイグナシオ・コルシーニも加わるであろうところですが、以前の愛聴盤シリーズに登場させてもらったホアン・ギドの「レジェンダ・レア」以上の破損でピックアップを受け付けず、どうにもなりませんでした。

カジェシータ・ブランセン

アントニオ・ボナベーナ

いくぶん一本調子気味ながら、じつにいい曲と思います。そしてオルケスタは各セクションが力量を存分に発揮して黄金時代のタンゴを堪能させてくれます。この楽団は多少地味な評価を受ける面もありますが、私の聴くことができるせまい範囲内では、安定したスタイルで、重厚さと芳醇さを身にまとった上物の赤ワインにも似た濃密な味わいが楽しめます。

オイガ

フランシスコ・カナロ

出だしからセンチメンタリスモの極致のようなメロディが、たまりません。作曲家エドガルド・ドナート大好きです。しいて難をいうなら、たとえばフレセドのアラバレー口とおなじく、2番のメロディが少し明るすぎに感じられることです。そのフレセドがやっている「オイガ」もまた非常にいいとは思いますが、ちょっと元気過剰の感なきにしもあらずで、それに対しカナロのほうは、陽気な第2主題の明るさまで調節して泣きに徹しており、この曲としては、これ以上の演奏は望めないと思います。

* * *

以下は愛聴盤になってくれるかどうか分かりませんが目下の「当座」愛好盤です——

ノーチェス・デ・インビエルノ オルケスタ・ティピカ・ビクトル

このワルツで私の目のつけどころはティピカ・ビクトルの演奏ではなく、歌わせても
らっている可憐な声のリタ・モラーレスです。¿リータ・コンプレックス？ と笑われ
るかもしれませんが、若々しく、節々にちょっぴりセクシイところのある歌い方が魅
力です。

モラーレスはOTVのワルツの吹込みから2年ばかり後に**Carnaval de Mi Barrio /
Sombra Gaucha**でドナート楽団にデビューしたわけで、デュオの相方オラーシオ・ラー
ゴスとは後に結婚するくらいですから大いに息が合ったにちがいません。女性を専
属歌手にしたのはドナートが最初だったという記事をTodotangoのどこかで見かけまし
たが、モラーレスのことなのでしょう。

松本保先生の作成されたエドガルド・ドナート楽団のディスコグラフィア（タンゲア
ンド・エン・ハポン第1/2号）によれば、リタは2年半のあいだにソロで4曲、ラー
ゴスとデュオで8曲、あとから入ったロメオ・ガービオとのデュオ3曲、トリオで3曲
録音していますが、タンゴが半分しか見当たらないのは仕方がないけれども残念です。



(写真提供：島崎会長)

ラグリマス エドガルド・ドナート

アローラスではなくドナート自作自演のほうです。

学生時代から飲み友達の山男が、近年さすがに足の衰えを自覚するようになり、タン
ゴなら足腰が弱ってもやれるから、と再びタンゴにコリはじめたのですが、古いもの
の方角を向いているのでいい塩梅です。その友人がコピーして聞かせてくれたMDの中に
この曲がありました。そのとき初めて聞いたわけではないはずで、あとからAMPのC
Dを見たところ解説の曲名の頭に○印がついていました（これは、と思ったら○印をつ
けることにしています）。

何かの加減で浅い印象しか受けず、記憶力低下によりそのままになっていたこの曲に、
また何かの加減で、あらためてとても好感を持ちました。とりたててどうというほどの
タンゴではなさそうですが、2番のメロディには強く惹かれるものがあります。リタ・
モラーレスのボーイ・フレンドであるラーゴスの声や歌いぶりまで好きになりました。
歌が終わるとスス・ムチャーチョスの蛇腹陣が例によって小気味よい活躍で、あっとい
うまに曲が終わってしまう感じです。生きているうちにこの演奏を楽しむことができ
て（ちょっと大げさでしたが）友人に感謝しています。

父とオーディオ

大岩 功（台東区）

齢を重ねるにしたがって時間の進み方が速く感じられる。十代の青春期の十年間と、四十歳からの十年間とでは、後者の十年間のほうがずっと速く過ぎ去ったように思う。「光陰矢のごとし」や「月日の経つのは速いものですね」といった格言や日常表現を最初に言い出した人は、きっと年寄りだったに違いない。いい若い者がこんなことを言うはずがない。

まだ時間がゆっくりと過ぎていた十代のころ、時間はいつまでもこのペースでゆっくり過ぎゆくものだと思っていた。LPレコードもカセットテープも、永遠にこの世にあり続けるものだと思っていた。もちろん、かつてシリンダーがSPに、SPがLPに変わったように、いずれ他の形のメディアに変わる時代が来るのだろうと理屈ではわかっていたが、そんなことはずっと先の未来のことだと思っていた。LPレコードが消えてCDになり、レコード棚がiTunesになり、ウォークマンがiPodになる時代がこんなに早く訪れるとは思ってもみなかった。自分がこんなに早く禿オヤジになるとは思わなかった、というのと同じであろう。

父はSP盤時代のタンゴをこよなく愛していた。生まれて初めて自分の小遣いで洋楽のSP盤を買ったのは1941年（昭和16年）、中学に上がったときだそう。たぶん、父の心の中ではSP盤は永遠に存在し続けるメディアだったのだろう。

タンゴを愛好していた父のもとに私が生を受けたのは1960年（昭和35年）のことである。幼少時の記憶の断片には、背景にタンゴが流れているものが少なくない。二歳ごろのことだと思うが、父が聴いているタンゴのリズムに合わせて、立ったまま私が膝を曲げ伸ばししていると、「こいつタンゴで踊ってるよ！」と父が嬉しそうに母に言ったのを覚えている。バックにタンゴの流れる最も古い記憶である。

このとき父がレコードをかけていた装置はセパレート型のステレオで、パイオニア製だった。パイオニアのウェブサイトをのぞいてみたら、同社は1962年に「世界初」のセパレートステレオを発売したとある。父といえば古いSP盤ばかり聞いている印象が強いが、なかなかどうして、けっこう新しもの好きの面もあったようである。

十年ほどのち、このステレオは父からのお下がりでもらうことになった。それから小遣いを貯めては自分用のオーディオ機器を少しずつ買い揃えていったが、パイオニアの世界初のセパレートステレオはずっと私たち兄弟の部屋で音を出していた。ティーンエイジャーというのはとにかく平気で無茶苦茶なことをするものである。ある日、そのころ流行し始めたシンセサイザーの出力をこのステレオのライン入力に無理やりぶち込んで、大音量で鳴らしたところ、



焦げ臭い煙を出してボイスコイルが焼き切れてしまった。哀れスピーカーユニットはご臨終である。しかしエンクロージャー（スピーカーの箱）の造作はしっかりしていたので、自転車で秋葉原のガード下（当時はオタクの聖地ではなく、無線マニアやオーディオ・マニアの巣窟だった。まあ、似たようなものだが）までひとつ走りして、大きな入力にも耐える他社製の同口径ユニットを買い求め換装した。ユニットを換装したこの箱は後年、別荘に運ばれ、現在でもときどき iPodにつながれて音を出している。ここまで使い倒されれば世界初のセパレートステレオも本望だろう。耐久消費財の鑑というべきである。

世界初のセパレートステレオを息子たちにお古のオモチャとして与えたころ、次に父がタンゴ観賞用に選んだオーディオ機器は、タンノイのスピーカーとラックスのアンプだった。望みうる最高の音でタンゴを聴くために、たぶん父はオーディオ雑誌やカタログ類とにらめっこをし、ショールームの試聴室に通いながら、この買物の計画を練りに練っていたものと思う。このとき父が買い揃えたタンノイ製のスピーカーシステムⅢLZ（スリー・エル・ゼット）とラックス製の真空管プリメインアンプSQ38F（エス・キュー・サンパチ・エフ）は、当時「黄金の組み合わせ」と称され、音楽愛好家にとっては垂涎の銘機だったという。これにガラード製のターンテーブル401、オーディオテクニカ製のトーンアーム、SP用のカートリッジにデノンDL-102、LP用には同DL-103を加えたものが、1970年代初頭の父の新しいオーディオシステムだった。

スピーカーシステムの音というのは箱の良し悪しに大きく左右される。特にタンノイのスピーカーシステムは、箱そのものが音楽を奏でているのではないかと錯覚するような、そんな鳴り方だ。イッチョマエにオーディオ雑誌などを読むようになった高校生の頃、「ジャズを聴くならJBL、クラシックを聴くならタンノイ」という話をよく見聞きした。秋葉原に通って両者のスピーカーを聴き比べ、なるほどと納得したものである。ジャズのように金管楽器とパーカッションが主体の音楽を聴くのなら、力いっぱい音を前に押し出すようなJBLサウンドには大きな魅力を感じる。一方、箱で響かせる傾向の強いタンノイのサウンドはたしかに、擦弦楽器や木管楽器の優しくふくよかな響きや、ピアノやギターの大奥深く繊細な感触を味わうクラシック音楽の鑑賞に向いている。

ところが「タンゴを聴くならこのスピーカー」という話は、オーディオ雑誌等のメディアではまず目にすることがない。私がティーンエイジャーだった1970年代には、タンゴは音楽市場のメイン・ストリームから外され、一部の熱心なファン以外は見向きもしない、古臭くてダサイ音楽という扱いを受けていた。音楽というものが若者の生活に不可欠な要素として本格的に定着しつつあったあの当時、若年層の嗜好こそはポピュラー音楽市場を牽引する原動力だったから、若者にそっぽを向かれたら終わりである。タンゴ向けのスピーカーの需要など、あったとしても無視されて当然だろう。

そのころ、あるオーディオ雑誌のインタビューで、父はこう言っている。「早い話が、アンプやスピーカーは何でもいい。タンゴの音がしてくれば満足」（別冊FM fan, 1980年夏号）。単純明快である。こう言い切る父が選んだのがラックスのSQ38FとタンノイのⅢLZだったのだ。



「タンゴはすごい！」と自覚した私の最初の体験は、アストル・ピアソラのレジーナ劇場におけるライブ（1970年）のレコードを父に聴かされたことだった。この年、父は長年の夢だったアルゼンチン訪問を果たし、約1ヶ月の亜国滞在の後、満足しきった顔で東京の家に帰ってきた。まだ小学4年生だった私は、やれ靴よりデカイビフテキにはマイッタだの、マテ茶の回し飲みはどれも抵抗があっただの、ときどきドアが閉まらないまま地下鉄が走ってビックリしたのだという、父の語る外国の珍しい話に興味津々だった。存命だったフリオ・デ・カロと会見した話とか、ロシータ・キローガに歓待された話とか、今にして思えば興味深いこともいろいろ聞いているのだが、もちろん子供だからタンゴの詳しい話はよくわからない。そんな中で今でも鮮明に記憶しているのは、生で聴いたピアソラのライブについて興奮して話す父の表情である。

「モダン・タンゴっていうんだ。これでもタンゴかねえと思うけど、すごい音楽だよ。こういうのはブエノスアイレスへ行かなきゃ聴けないんだ」そう言いながら父がレコードに針を下ろす。Verano porteñoのクライマックス。タンノイの箱が渾身の力をふり絞るように唸りをあげる。そのサウンドに私は、それまで経験したことのない、鳥肌の立つような衝撃を受けた。音楽を聴いて身震いを感じた初めての体験である。生まれた時から来る日も来る日も、家で耳にしてきたタンゴとはまるで違う、血沸き肉踊るサウンドだった。

入り口がピアソラだった私のタンゴの好みは、明らかに父の好みとは異なるものだ。けれども父のエラいと思うところは、自分の好き嫌いとは別に、良い音楽は良い、すごい音楽はすごいと、何でも公平に評価することだ。ピアソラの音楽は必ずしも父の好みではなかっただろう。だが、ブエノスアイレスでピアソラのライブを聴いた夜のことを話す父の口調や表情からは、心からの率直な興奮と感動が伝わってきた。世代間のギャップを超えて父と子が感動を共有し得た、数少ない瞬間のひとつだったと思う。

十代の頃に私が好んで聴いていた音楽の中心に、常にタンゴがあったわけではない。同年代の少年少女と同様、英米のロックや日本のポップスがメインであって、自発的にタンゴを聴くことはあまり多くなかった。しかしピアソラだけは別格だった。ピアソラの新譜が届けば聴かせると父にせがみ、また旧作のレコードもよく聴いた。1965年発表の「ニューヨークのアストル・ピアソラ」などは、それこそ擦り切れるほど聴いたものだ。これをきっかけにオラシオ・サルガン、フリオ・デ・カロ、ホセ・コランジェロなど、タンゴについては脈絡なく「乱読」ならぬ「乱聴」をした。サルガンのダイレクト・カッティングのLP（1969年録音）を聴いたときは、ズバ抜けた音の良さもさることながら、その演奏のクールな緊張感に手に汗握る思いがした。コランジェロのTrasnocheを聴いてえらくカッコイイと感じ、そう父に話したところ「うーん、コランジェロねえ。タンゴの抜け殻みたいなもんだな」と言われてしまった。しかし、「抜け殻」でもなんでも、ちゃんとレコードを入手してきちんと内容をチェックしているのが父らしいところである。

父のおかげで、私は思春期から青年期にわたる時期に、同年代の若者が接する機会の少なかったタンゴというすばらしい音楽を知り、良質の音楽に陶酔する喜びを知った。どうして、若い頃には時間がゆっくりと過ぎるのだろうか。私の考える答えはこうだ。学校の勉強以外にも、良い本をたくさん読み、良い音楽をたくさん聴き、良い映画をたくさん観られるように、神様が若者たちにたっぷり時間を与えているのだ。

2012年9月29日

「小さなレコード・コンサート」

山根 洋（横浜市）

横浜・元町から坂道を登ると港の見える丘公園～山手、外人墓地と、横浜のもっとも横浜らしいロケーションがある。ここに七つの西洋館が瀟洒に立ち並んでいる。その中の一つ、234番館で毎月第2土曜日の午後行われているSPレコードによる小さなレコード・コンサートがある。“蓄音器で楽しむ午後のひと時”である。このレコ・コンを主催しておられるのは、以前日本タンゴ・アカデミーの副機関誌・Tangolandiaの編集をしておられた山本久子さんである。

この会の取材を依頼されたのが今年の4月のこと、もちろんこの会の存在とその評判は良く知っていたのだが、お恥ずかしい話だが、一度も聴きに行ったことがなかったので、とにかく行ってみることにした。4月の例会は14日、その日はあいにくの雨、まだちょっと寒い日だった。その第62回目だという、単純に数えてももう5年以上続いていることになる。その天候のせいか、会場におられたお客さんは10人足らず。部屋の広さはせいぜい30～40平方メートル位だろうか・・・20脚ほどの椅子が並べられている。

プログラムは、先ずクラシックから。フリッツ・クライスラーのバイオリンで、「ジブシーのセレナーデ」とレフ・オポーリンのピアノで「ハンガリー狂詩曲」。続いて、ドイツの軽音楽のオーケストラで3曲。そしてアルゼン



愛器と山本久子さん

チン・タンゴは「メンティエラ」の3曲聴きくらべとフランシスコ・ロムートが4曲・・・最後は「ラ・クンパルシータ」というおよそ1時間のプログラムである。ざっとこれが、1回分の内容です。

そこで私は、山本さんにいくつかの「質問」をお渡しし、お答えを頂くことにした。そのお答えに従って、この原稿をまとめていきたいと思います。

* * *

○ このレコード・コンサートを始めたきっかけは、また、234番館にした理由が何かあるのですか？

● 横浜港を見下ろす山手の丘に、七つの西洋館（大正～昭和初期のもの）が保存され、公開されている中で蓄音器を置いている館がなく、当時をしのぶきずなの一つとして、「この古い館から、当時そのままに蓄音器から音

楽が流れていたらどんに素敵でしょう」と、当時スタッフとして勤めていた私が会議で発言したのがきっかけです。2005年のクリスマス・イベントで、1950年代のアメリカの居間を再現し、私のコロンビア製の蓄音器を家具調度品として展示し、その場でクリスマス・ソングのレコードを聴いていただいた時、来館者の反応が素晴らしく良かったことや、昭和初期が日本の蓄音器とSPレコード生産の創生期で、国産初の蓄音器製造会社の創設者が当時近くに住んでおられた縁もあり、翌2006年の9月から、山手234番館の定期イベントとして毎月第2土曜日の午後2時から「蓄音器で楽しむ午後のひと時」と題して6年続いています。今までに2011年の3月の大震災と、6月（私的都合）の2度お休みした以外は休まず続けております。

さらに思い出せば、2003年12月の山手のイベント「世界のクリスマス」で234番館が「アルゼンチン」を取り上げ、アルゼンチン協会の方々のご協力を得、西村秀人さんにバンドネオンをお借りして飾ったりしました。その一環として、館の創建当時（1927年ころ）のアルゼンチン・タンゴのレコード・コンサートを企画したことがあります。その時、講師

として島崎・現会長にお願いし、島崎会長の蓄音器で吉田義之さんがお手伝いくださり、SPレコードの鑑賞会が行われました。その時の蓄音器の音色にすっかり魅了され、ますますSPレコードと共に蓄音器にこだわりを持つようになったように思います。しかし、この時点では、まさか自分が現在の鑑賞会を主宰することなど全く考えておりませんでした。ともあれ、山手と蓄音器には深い縁を感じています。

○ 蓄音器への思い、私もとても雰囲気の良いこの部屋でSPレコードを聴いて、あらためて「こんなに素晴らしい音が」、と意外でした。ところで、蓄音器を2台使っておられるそうで・・・

● 蓄音器は2台、「コロンビア 114型」、日本コロンビア製（1932年製）と、「ビクトローラ 1-90型」、日本ビクター蓄音器（1927年製）です。蓄音器は私物ですが、展示品として置きっぱなしでしたから、勤めていたころはロッカーの中に「チゴイネルワイゼン」や「クンバルシータ」などを入れておき、特に小・中学生や見学者で非常に興味を持った方に聴かせていました。レコードさえ見たこと



234番館

のない世代の人には驚きと、その音色に感動があったようです。鉄針がレコードの溝をなぞる時、ふくよかな温かみのある音とともに当時のアーティストたちの生き活きとした鼓動と、過ぎし時代の郷愁を深く感じます。

退職後の現在は山手ボランティア協会の一員として活動しております。

○ このようなスタイル～曲数が比較的に少ないこと、クラシックの曲を加えたことなど……。何か理由があるのですか？

● 不特定多数の来館者に、自由に聴いて頂こうという趣旨で、一時間を目安にプログラムを構成しております。最初はコンチネンタル・タンゴを含めたタンゴのみでしたが、少しでも多くの人に楽しんでいただけるには、だれもが聴いたことのあるメロディーが必要であるということに気が付き、2007年頃から3部構成に切り替え、クラシック、シャンソンや歌謡曲やポピュラーソング、後半をタンゴとしています。タンゴを聴くのが全く初めてという人も多く、タンゴの選曲には少々頭をひねります。なるべくよく知られている古典タンゴを1～2曲入れ最後はラ・クンパルシータを毎回バージョン違いで聴いていただいております。といっても、自分好みのものが多くなりますが……。このような形でのタンゴの鑑賞はめったになく、通りすがりの方でも足を止めてくださる方がいれば、特に若い人の耳に少しでも印象つけられたら嬉しいです。そんな思いで続けています。12月のクリスマス・イベントの時だけは、約2時間30分の枠で、お茶つきの有料、申し込み制をとっております。

余談ですが、クラシックの曲の選曲をしていて高校時代のことを思い出し、おどろいたことがあるんです。それは高校の部活で「音

楽鑑賞クラブ」に所属していて、文化祭などではおおぜいの人を前に、曲の紹介や作曲家の説明をしていたのです。「クラシック」という規定がありましたので、仕方がないのですが、当時から家ではタンゴばかり聴いていた私が、さすがに高校生でタンゴの紹介はしにくかったのかと、特に私は失恋の曲が好きでしたから……。思い切って1曲くらい冒険してみればよかった、と今更ながら思います。レコードをあれこれ選んでいると、当時と少しも変わらない自分にあきれて苦笑してしまいます。好きなことを今でもできることに、喜びと感謝の気持ちを深くするこの頃です。

○ 少しでも多くの人に聴いていただく、～とてもよいことですね。プログラムの選曲はどのようになさるのですか？

● その時々、西洋館のイベントに合わせて、季節だったり、あるテーマを持ってプログラムしています。そして、いくつかのジャンルを同時に聴くことは、タンゴを初めて聞く人も聞きやすいようです。音楽の持つ特徴がはっきり感じられるのだと思います。この2～3年は、タンゴではアーティストの紹介を兼ねて、その楽団のものをまとめて聴いたり、有名曲の聴きくらべを入れたり、変化をつけるよう工夫しています。また、選曲はタンゴ以外のジャンルでも自分の感性に合ったもの、西洋館にふさわしいものを心がけています。

○ SPレコードを集める（探す）のも大変なご苦労があると思いますが……。

● 十数年前の私はタンゴオンリーで、しかも復刻CDで十分と考えていたのですが、思いがけないSPレコードとの出会いがあり、幼いころから聴き親しんだ音源（テープ）のレコードと次々に出会って以来すっかりその虜

になってしまったのです。何といても、自宅でキログの「マンドリア」をSPで初めて聴いたときの感動が、今に至るきっかけといっても過言ではありません。CDとは明らかに音色が違います。個人の好みの問題でしょうが・・・。

レコード店から送られてくるリストも大きな情報源ですが、何が何でも欲しいと思うよりも、出会いを大切にしています。それにはこまめにレコード店へ出向くことでしょう。この頃はそれもかなわなくなっていますが・・・。それから、こういうことをしていることで、ぜひ活用してほしいという寄贈もあります。そういう方々の思いも込めて、絶好の場所、館の理解も得、私の少しの努力で楽しんで頂けるなら、何も言うことはありません。蓄音器と、レコードが日の目を見て一番喜んでいるのかもしれない。

* * *

とても素晴らしい、そして楽しいお話……。本当にありがとうございました。

SPレコードという、とっくに現役を引退してしまっただけなのに、こんなにも私たちに郷愁を思い出させてくれる、同時に、目をつぶって聴いていると、半世紀以上昔のアーティストたちが、本当に、目の前で演奏を聴かせてくれているのかと、ふとそんな錯覚を起こさせるような気になってしまいそうです。

山本久子さんが、ご自身が楽しみながらやっておられるこんなに素晴らしい活動が、横浜のもっとも横浜らしい山手から発信されています。どうぞ気が向いたら、ぜひ一度聴きにいらしてください。そして、お帰りの際はそのまま桜木町～横浜方向へ帰らずに、234番館から反対方向（左へ）～バスならば「保土ヶ谷駅行き」に乗って帰ってください。脚力に自信のある方は、少し歩いてみては如何でしょう。眼下に見下ろす横浜の現代の姿～“みなとみらい地区”の高層ビル群から、市の中心部のほぼ全域を、また特別な感情で臨むことができます。

(完)

山手 234 番館
蓄音器鑑賞シリーズ・66
-SPレコード・プログラム-

2012年8月11日(土)
午後2:00~

蓄音器で楽しむ午後のひと時

♪グアデシガ〜
1、エリーゼのために (ベートーベン)
2、別れの曲 (ショパン)
3、感傷的なワルツ (チャイコフスキー)
♪懐かしいワルツ〜前を教った3曲〜
4、夜に咲く花
5、夜のアリア
6、夜のアリア
♪おなじみのタンゴ・ワルツ〜
7、さらば草原よ
8、涙き光に
9、胡蝶 (ビニエンタ)
10、フント・アル・マル
11、センチメント・ガウチョ
12、空のひたけ50
13、真夏の嵐 (チア)
♪クンバルシエタ
O.T. クリオジャ・アルハンティーナ

(歌) 波島
マランド楽団
アリエル・ベテルネー・ヨ5重奏団
ロス・フロビシタ・アノス楽団
(歌) アガ・ファルゴン
アヘシラオ・フェラサーノ楽団
ベドロ・マフィア楽団

次回は9月8日(土)
午後2時~
お問合せ先 025-9399
山手 234 番館
企画・構成・山本久子

LA ÚLTIMA COPA / YIRA YIRA

私とタンゴ 出会いに導かれて

多村和子 (横浜市)

6月21日Tangolandiaの大澤寛氏から「正式執筆依頼」というメールが届きました。

そう言えば数ヶ月前氏とボルヘス談義をしたときに「飛んで火に入る、、、」というメールを頂いたことがあったなあ。まんまと捕まったわが身を嘆き、密かに氏に「誘蛾灯の君」という名を献上することにしました。

若いころから決して熱烈なタンゴファンではなかった私が、何故今こうしてこの文章を書いているのか、この機会に振り返ってみることにいたしましょう。

NHK文化センターの「アルゼンチン・タンゴをスペイン語で」という講座に参加したことが、全ての始まりでした。1996年の春、その頃私の仕事は夕刻に集中していて、第2火曜日の6時という時間がぽっかりと空いたのは、何とも不思議な巡り合わせだったという他ありません。

横浜市 桜木町 ランドマークタワー。高速エレベーターで16階へ。そこには輝く夜景の広がる大きな窓。磨き抜かれた木の床。待っていて下さったのは長身の美しい女性、佐藤玖美子先生。記念すべき第1曲目はA MEDIA LUZでした。授業は先生の詩の朗読に始まり、語句の解説などがあった後、3-4人の歌手の歌を聴き比べました。感想を求められることもありました。メモによるとその夜は、サラ・モンティエール、ガルデル、ワルテル・グティエレス、リベルタ・ラマルケを聴いたとあります。生徒は30数名、それぞれダンスや歌の好きな方、中南米の国々に滞在したことのある方など様々でした。その中に、極めてタンゴ通だと知れる方々が数名いらっしゃいました。その中の一人、温厚な感じの紳士が、よく私の隣に座られるようになりました。その方とのやり取りの前に、私自身の受講の動機をお話しなければなりません。

私が東京で大学生活を過ごした50年代は、所謂、音楽喫茶全盛時代で、コーヒー一杯で一流の演奏を何時間でも楽しめる店が沢山ありました。偶々入った銀座のタンゴ喫茶コロンビアでは、西塔辰之助とオルケスタ・ティピカ・パンパが演奏していました。一方私はモーツァルトとベルディーのレクイエム、ベートーベンの第九などを歌う合唱団に属していて(ちなみにソプラノでした)、また能の仕舞の稽古にも励むといった、まあ固い学生でしたから、タンゴという音楽が薄暗い照明やコーヒーの香りと相まって、何やら妖しい魅力で私を誘惑するのは容易いことでした。新宿のラ・セヌなどにも行きましたが大きなステージでないコロンビアが私のお気に入りでした。でも、ムードに浸っていただけの私がそこで覚えたのはマエストロの名前だけです。レコードを聴く店には男子学生と2-3回行ったでしょうか。曲名や演奏者を教えて貰ったものです。自分でレコードを買ったのは、その後結婚までの短い期間だけだったようです。数十年の時

が流れ、忙しい仕事の合間に、テレビスペイン語講座を観るようになりました。'94年のテキストがのこっています。タンゴの歌が念頭にあったのでしょうか。学生時代のあの短くはかない逢瀬のタンゴが、脳ミソの片隅にウイルスのように潜んでいて、このような機会を狙っていたのかも知れません。

先の講座の世界へ戻りますと、佐藤先生は駒沢大学の教授であると同時に、オルケスタ・ティピカ・パンパの二代目マエストロ西塔祐三氏夫人でもあることを伺い驚きました。私が昔話をいたしますと、先生は“コロンビア時代の辰之助をご存知ですか？”とマジマジと私の顔をご覧になりました。私はとても若く見られていたようです。ダリエソ・スタイルという言葉や、辰之助氏がダリエソから直々に指導を受けたというお話もその時伺いました。

ランドマークタワーでの受講は1年間しか叶いませんでしたが、数年後に東京下高井戸の先生のご自宅に移った勉強会に再び参加するようになりました。そのうえ、その会で知り合ったずっと年下の友人と二人で、スペイン語の文学作品講読の手解きをして頂くことになり、これまでベッケルやヒメネスをはじめ様々な魅力ある作品に触れて来ました。女三人、お茶を頂きながら本を読む時間は、最高に楽しいひとときです。

◎（横浜ポルテニア音楽同好会との出会い）

あのタンゴ通の紳士のお話に戻りましょう。私は物知りらしいその方に“横浜に昔のタンゴ喫茶のようなものはありますか？”とお訊ねしたのです。すると“月に1回タンゴ好きが集まってタンゴを聴いている処があるからいらっしゃい”とメモをわたされました。'97年6月の暑い日、日傘をさして訪れた横浜駅近くの三田会場。そこでは、まず生まれて初めてお目に掛かるほど大勢の年配の男性に圧倒されました。室内にはアルゼンチンの国旗やバンドネオンの写真が飾られていました。その日のプログラムは第1部が女性会員による3・4曲選、第2部が岩崎永一氏によるSP名曲選でした。私は、ここでまた初めてスピーカーを眺めながら40曲のタンゴを聴くという試練に直面することになるのです。感想は？ なに？ 疲れた？ 眠たかった？ なんていう罰当たりな！ 猫に小判、豚に真珠、お前なんか即追放！ とお叱りを受けることもなく“またいらっしゃい。来月はライブですよ”と、件の紳士はにこやかに見送って下さいました。帰宅して一息つき、プログラムを眺めると「メルセ寺院の鐘」の下に“教会の鐘の音入り”と書き込みをしていました。山本久子さんの思い出のある曲で“ピアジのピアノの鐘の音は最高”と会報に書いておられました。翌月には、泉谷隆男さんが現地で録音なさったという本物の鐘の音を聴いたようにおもいます。ライブは、歌手の中川美亜、演奏は東谷健司、熊田洋そして小松亮太の各氏が出演しました。初々しい小



ウルグアイのホテルにて セサル・サニョーリ夫妻と

松亮太氏の面影が記憶に残っています。やがて会場は現在の京急沿線戸部駅近くのオオハラホールへ移ります。広くて明るい会場。スピーカーを眺めて聴くタンゴにも少し慣れて来ました。未だ会員にはならず半年が過ぎようとしていました。そんなとき西村秀人氏が引率して下さるアルゼンチン旅行の計画が発表されたのです。8月、夏休み、私は思わず手を挙げましたが“正会員のみです”とビシヤリと言われ、そう、そんな不純な理由でようやく横浜ポルテニア音楽同好会の会員になりました。'98年春だったでしょうか。西村氏には '98年と '02年の2回、アルゼンチンとウルグアイへ連れて行って頂きました。その体験がタンゴに関してゆく決心をさせたと言っても過言ではないでしょう。西村秀人氏は私にとって一番大切な方です。

ここでごく小さな思い出話をひとつ。“知子さん、サインをして頂いたら？”ガイドの原あやさんが言ってくださいました。買ったばかりのCDにサインをして頂いて見上げた長髪のバンドネオン奏者が、セステート・スールのバンドリーダー、ファビオ・ハーゲルです。私はそれまで、有名人のサインを貰うという発想を持ち合わせていませんでした。60歳にしての幸運な初体験でした。



セステート・スール
'98年8月5日 サポール・ア・タンゴにて
中央のバンドネオンがファビオ・ハーゲル

◎ (タンゴ心酔クラブへの入会)

2003年、横浜山手の洋館234号館は、恒例の世界のクリスマス飾りをアルゼンチンと決めました。日亜協会のイレーネ賀集さんが中心となって、アルゼンチン国旗の色、青と白を基調とした美しい飾り付けで、アルゼンチンのクリスマスを演出して下さいました。別室では、手書きの解説と写真でアルゼンチンを紹介することになり、当時館の職員だった山本久子さんを手伝って楽しい時をともにしました。写真の展示には息子の手を借りましたが、プロらしい立派なパネルを作ってくれました。タンゴの聴き手としてサラブレッドの山本さんの紹介で、2004年心酔クラブに入会させて頂きました。心酔クラブは、日本タンゴ・アカデミーの会長島崎長次郎氏の主宰なさる会ですから、何の説明も要りませんが、堅苦しくなく、いつの間にか笑顔になって帰ることの出来る会です。私にとっては天上人たちの、本当の天上人になれるにはまだまだの方々ですが、昔話や、ときにはからかい合いなどが、音楽に一味も二味も加えているように思われます。ボルヘスの短編小説「バラ色の街角の男」に「ラム酒、ミロンガ、女、気安く与太を飛ばしては、ひとりひとりの背中をどやしつけるロセンド、それは本当の友情の印みたいに思えてねえ、、、」という件があります。いえ、島崎氏は決してどやしつけたりなさいませんよ。やさしく、ソフトにです。そのソフトにして強力なお誘いに屈して、昨年私は三つ目の同好会、日本タンゴアカデミーの会員になりました。私の柄ではないと思いつつ、山を形成するには裾野も必要の精神で名簿に名を連ねることにいたしました。

ようやく、私の「誘蛾灯の君」こと大澤氏との出会いに漕ぎつけました。2010年3月、横浜ポルテニア音楽同好会の例会にゲストとして出演して下さいました。その時の大澤氏の印象は誘蛾灯などではなく、稲妻のようだったと記憶しています。脳ミソよ目覚めろ！心よ波打て！みたいな。ワルツとミロンガに絞った選曲にもこだわりが感じられました。皆が一様に心を打たれたのは、氏の名訳の添えられた「Harina y pan」と「A mis manos」ではなかったでしょうか。氏の訳詞はいつもとても魅力的です。リズムがあって、気分ってものがある、なにかしら訳詞を楽しんでいらっしやるように感じてしまいます。2011年には「アルゼンチン・タンゴ酒唄綴り」と題して、皆が心地よく酔える曲を選んで下さいました。酔っ払いの泣き言もこうしてタンゴで聴けばまた楽し。でも母ちゃんや子供を泣かせる酒はよくないな。Un boliche : Papá, vamos, que mamá te llama 女の子は父ちゃんのシャツの裾を引っ張っているんでしょうかね。お酒の飲めない私は、人生の楽しみを半分味わえてない気分ですが、酒唄を聴くのは大好きです。

こうして振り返ってみますと、なんとも主体性のない自分が浮き彫りにされましたね。先輩諸兄姉には、これからも手取り足取りして、大変短い手足ではありますが、タンゴの深みへ誘って頂きたいと願っています。

アルゼンチンタンゴ真鶴上陸

「アルゼンチンタンゴ真鶴上陸」と銘打って真鶴町立体育館で9/16にタンゴコンサートが催された。真鶴タンゴ実行委員長 青木智子氏、真鶴町長 青木健氏、アルゼンチン共和国大使館 アレギ (Luis Arregui) 公使等の挨拶があり。演奏：古橋ユキ クアルテート (古橋ユキvl、深町優衣pf、仁詩bn、斎藤直樹cb) 唄：ユリ・アスセナ、踊り：エンリケ・モラレス&エマ・モラレス、約400人の観客の中での熱演は暑い会場を更にヒートアップ、無料で配られた団扇でバタバタ、中には冷えたペットボトルを頭に乘せての鑑賞。飛び入りのダンスカップルが二組も加わり、コンサートは大いに盛り上がったが後部席の一部には音響に対する不満があったようだ。

セカンドコンサート (二次会) は鮮魚料理に冷えたビールにワインは格別の味わいがあり、大いに感激、楽しい一日でした。 (脇田富水彦)



暑い！



古橋ユキ タンゴ クアルテート

(いずれも撮影筆者)

“フリアン”考

櫻井征夫（埼玉県）

タンゴ愛好家の範疇からはほど遠く、所謂いろいろな分野の音楽を聴くのを楽しむ、単なる音楽好きに過ぎない私が、この数年アルゼンチンタンゴを聴く機会が多くなりました。その過程で好奇心に惹かれ自分なりの解釈を加えて楽しむ余地があればと、作った寓話です。取り上げた題材自体アカデミー会員の方々にとり既によく知られている類いのもので、いわば何番煎じかになる話かもしれません。



2010年11月の東京リンコンで、O.T.ヴィクトル演奏の“フリアン”を聴きました。この曲の演奏には高い評価を得ているヴィクトルだけあって、申し分の無い作品でした。曲自体は幾度か聴いておりましたが、この時、フリアンとはどんな男なのだろう、との思いがわき、帰宅後、高橋正武氏の西和辞典を引いてみると【Ceutaの大守、アラビア軍のイベリア半島侵入軍を助けた裏切り者の標本】との記述でした。ついでに手持ちの他の辞書を見ましたが裏切り者なる意味の記述がないので、どのような事情が有るのか興味を覚え歴史参考書類を参照しました。

—時代背景—

4世紀末ローマ帝国に依るキリスト教の国教化に伴い、同じ一神教のユダヤ教への圧迫が強まり、多くのユダヤ教徒がアラビア半島や北アフリカに逃げた。イベリア半島には5世紀初め、西ゴート王国が生まれたが、人数的に少数の西ゴート族はローマ支配時代のキリスト教組織を利用して支配体制を作っていた。5世紀後半西ローマ帝国が滅亡すると、西ゴート王国内の秩序の弛みが明らかになり始めた。7世紀には王国内のユダヤ教徒やユダヤ教への改宗者に対する残虐な迫害が行われ、多くの者が北アフリカに逃げ延びたが、西ゴートにとっては強い復讐心を持った人々を近隣に持つ事となった。他方7世紀の中頃からイスラム教が急速に勢力を強め、アフリカの諸族にも広がった。

フリアン伯爵はイベリア半島に最も近い北アフリカの Ceutaの大守をビザンチン帝国から任命されていた。一方西ゴート王国ではロドリゴ公爵が（最後の）王位に就いたが、彼の施政に対し王国内部からの不満が鬱積していった。

—フリアン侯が裏切り者と蔑称されるに至った諸経緯—

この件についての明確な指摘は見当たらないが、フリアン侯に関する事項で先ず共通して触

れられていることは以下の伝承です。即ち“ロドリゴ王はある日、城（トレド城）足下のタホ河で水浴中の美しい女性に魅せられ、手をつけ囲い者にしてしまう。この娘こそフリアン侯の愛娘フロリンダ（La Cavaと愛称される）で、これを知ったフリアン侯は Ceuta 周辺の諸族の支援をえて、彼らのイベリア半島への侵攻に便宜をはかった（711年）”と言うもの。この事件を契機に西ゴート王国は滅び、以後 1400 年末のグラナダ陥落迄イスラム・スペインの時代が続く事になった。



トレド城とタホ河（フロリンダ事件の舞台）
（16世紀初頭・カルロス5世により再建されたもの）
（撮影：筆者）

この伝説から、西ゴート王国に対する裏切りを示唆するとも受け取れるが、フリアン侯がビザンチン帝国から任命を受けていた事からすれば、単純に裏切り者とするには説得力に乏しい。

近年の研究では、フロリンダに絡む侵攻の話は、西ゴート滅亡の事件に詩的に花を添えたもので信憑性は少ない、との見解になっている様だ。むしろ、ロドリゴ王が滅びたのは、彼の乗馬を金、宝石類で飾り付ける等の贅沢、不道德やスキャンダル等の結果で当然の成り行き、とする厳しい指摘すらみられる。ともあれ伝説や伝承は人々の間から自然発生的に生まれ、伝えられるものが多く、人々の心情が反映されているものが多い事を承知しておきたい。

“裏切り者”と言う蔑称には何か強い感情や意図が含まれている様に思われる。研究者によっては以下の様な要素を指摘する者もいる。

—フリアン侯が便宜を図った北アフリカ諸族は色々な部族の混成集団であって、その中核となったベルベル人は殆どユダヤ教に改宗した者やユダヤ人そのものであった。彼等は西ゴートのキリスト教徒を追い出し、都市の行政面のトップについた、と激しく非難する当時のキリスト教関係の史料が残されている。

—中世のスペインでキリスト教的叙事詩流行の時代になると、英国のアーサー王伝説等の騎士物語がスペインにも遅れて入って来て、イスラム教の侵入に立ち向かったとしてロドリゴを英雄視する叙事詩的風潮も生まれるに至った。（その対極にフリアンが置かれる事になる）

話は逸れるが、イベリア半島のフリアン侯の時代を約350年遡る頃のローマ帝国に“背教者”（裏切り者）と今日迄呼ばれている皇帝がいた事を塩野七生氏の大作“ローマ人の物語”で知った。ユリアヌス帝（Julianus. スペイン語でJULIAN）在361-363年。

二代前のコンスタンティヌス大帝によるキリスト教公認と振興が、ローマ帝国の伝統であった多神教容認からはずれ、一神教による異教迫害と現世の利益追求の弊害を生み出す事を懸念した彼は、キリスト教公認令を撤廃し、伝統的な信教の自由を取り戻そうと試みたが、不慮の死により短期の在位で、背教者（裏切り者）の蔑称のみが今日迄付きまどっている。塩野氏は彼の先見性をむしろ評価している。

裏切り者（背教者）と言う蔑称が千数百年もの長い年月を経ても続いているのは、やはりある信念に依って付けられたのではないか、と考えたくなる。ユリアヌス帝へは彼の確信に基づいての行動に対して、フリアン侯の場合は不慮の結果に対してのもので、何れも宗教が絡んだ夫々の時代背景が強く作用している様に思われる。

タンゴ“フリアン”には“踊り上手で、娘達の憧れの的の男を恋人にしていたある女性が、彼に裏切られ見捨てられた後も、彼を忘れられず想いを募らせて何時の日か戻ってくるのを待っている”と言った内容の歌詞がついています。E.ドナートが作曲した時点で既に“フリアン”と言う題名をつけていたのか、J.パニサが“フリアン”を題材に作詞していたものにドナートが曲をつけたのか、又はその逆か。何れの場合でも、どのような名前でもよかったものに、或る男を題材にした曲・詩を作ったのかもしれない。でも何故フリアンと言う名前を取り上げたのか、その辺りを知りうる資料を持ち合わせていないので、無責任な想像を交えて纏めることにしました。

ドナートは10代の半ばころまでは、きちんとした学校教育を受けていた様であり、多少なりともスペイン史について知識を得ていた可能性はあると思います。パニサの生い立ちについての手持ちの資料がなく不詳（どなたかご教示願えれば有り難く）。我々がドン・ファンを女たらしのイメージで知っている様に、キリスト教社会に育った彼らには、歴史の詳細は兎も角としてフリアン＝裏切り者と一般に言われていることや、フロリンダにまつわる伝説への知識は有ったのではないか。唯、フリアンをそれほど悪い男とするイメージではなく、幾分か肩入れしたくなる男程度には捉えていたのではないであろうか。

“裏切って”とフリアンは悪い男と印象付けながら、それでも愛しく忘れられぬ男であると明かして、二人の想いが融合して出来た作品である様に感じます。失恋を種にした男の嘆き節の多いタンゴの中で、恋人を想う女心を歌って『女性にだってこんな失恋があるのさ』と一石投じたのかもしれない。しかしその女性が尾羽打ち枯らした様子はなく、むしろロマンチックな感じさえ与えてくれるのは、ドナートの若さが生んだ美しい旋律に依る救いなのかも知れない。

実は歌われているこの曲を、そのとき迄聴いた事がなかった。2011年5月に催された心酔クラブの旅行のプログラムで（聴きたい曲）のリクエストがあり、私は躊躇なくロシータ・キログの唄うフリアンを希望した。希望の理由を鳥崎会長から尋ねられたとき、長い説明となるのを避けるため『未だ聴いた事がないので』と素っ気ない返事をさせて頂いた事を覚えている。

1900年頃ブエノス・アイレス市の下町で生まれ、恵まれない生活環境で育ったと言われる彼女こそ、この曲が内包する意味合いや、作られた1920年頃の時代背景を感じさせる歌い方が出来る歌手ではないか、と思った訳です。激しく訴えるのではなく、訥々と恋心を語りかける彼女の歌唱こそふさわしいのでは、と。案に違わず、の逸品でした。

“メンサへ” 考

齋藤 富士郎

高山正彦氏はその著書の「タンゴ」（新興楽譜出版社、昭和29年）の中でディセポロのメンサへ（Mensaje）について「・・・晦渋な内にもこの人らしい皮肉さがひそんでいる。決して凡庸の作品ではないと云え、そこには何の飛躍も展開もなく、唯、沈滞と枯渇が感じられるのみである。・・・」と述べている。はっきり言って酷評である。私がこの文章に接したのは、まだ駆け出しのタンゴファンであった今から50年以上前で、勿論メンサへを実際に聴いたことも無かった。それで曲よりも先にこの高山氏の文章が頭に刷り込まれてしまい、それ以来メンサへとはそういう曲だと思っていた。

私が実際にこの曲を耳にしたのは藤澤嵐子さんの復刻LP（日本ビクター SJX-8536）を通してであった。タンゲアンド・エン・ハボン誌6号（2000）所載の藤澤嵐子さんのディスコグラフィによれば、これが録音されたのは1953年である。藤澤さんが早川真平氏、刀根研二氏と共に第1回の訪亜に出発されたのは1953年夏、戻られたのは同年12月8日である（藤澤嵐子「タンゴの異邦人」中央公論社、昭和31年）から、この録音はおそらく渡亜以前か、あるいは帰国直後のものである。それにしてもディセポロが死んでから間もないこの時期に、まだよく知られていない、はっきり言って難しいこの曲をよくも歌いこなされたものである。

メンサへはディセポロ（1951年12月23日没）の死後に発



見された遺作で、それにカトゥロ・カステイジョが後から歌詞を付けたものである。だからメンサへはいわばあの世のディセポロとこの世のカトゥロ・カステイジョとの合作と言った方が良い。

メンサへの曲想はたしかに高山氏の言うように晦渋でわかり難い。スペイン語の歌詞が聴き取れない私のようなものにとっては、曲だけ聴いた限りではとても名曲とは思えない。ところが不思議なことにアルゼンチンの多くの歌手がこの曲を歌っているのである。筆者が調べ得た範囲でも、藤澤嵐子さんに加えて、タニア、ロベルト・ルフィノ、ロベルト・ゴジェネチュエ、スサナ・リナルディ、

ビルヒニア・ルケ、ラウル・ベロン、ギジェルモ・フェルナンデスと言った有名歌手からバネサ・キロス、ノエリア・モンカダ、シルバナ・グレゴリ、サンドラ・ルナ、アリシア・ポメッティ、クリスティナ・コンデ、ビルヒニア・ベロニカ、ミミ・コズロウスキーなどに至るまで16名を数えるから、実際にはもっと多くの歌手が歌っているだろう。これは何故だろうか？ 秘密は歌詞にありそうである。

メンサへの歌詞はウェブサイト

“http://www.hermanotango.com.ar/PAGINA_PRINCIPAL.htm”

にあり、また杵築 實氏がその邦訳を氏のホームページ

“<http://www.kitanoit.com/~gotan89/cgi/gotan.cgi?act=dsp0&abc=m>”

に掲載しておられ、それらは誰でも自由に閲覧できる。以下、それらを引用して話を進める。

歌詞は先ず

Hoy, que no estoy	今日、私はいない
Como ves, otra vez	君にもわかるだろう・・・もう一度
Con un tango te puedo gritar...	タンゴでは 君に叫ぶことができるのに・・・
Yo, que no tengo tu voz...	私は 君の声を受け取れない・・・
Yo, que no puedo ya hablar..	私は もう話すこともできない

で始まる。

冒頭の“Hoy, que no estoy”は有名なハムレットの独白の“To be or not to be”のnot to beと同じような意味に解釈でき、「今日、私はいない」とは「今日、私はこの世にはいない」と意識できる。すなわちこの歌詞は、あの世へ逝ってしまったディセボロが「彼岸」から「此岸」の「君=我々一人一人」に向けて話しかけるメッセージの形になっている。だからメンサへは普通は「メッセージ」と訳され、杵築氏は「伝言」と訳されているけれども、厳密には「あの世からのメッセージ、伝言」乃至は「遺言」である。

歌詞は更に

Mensaje	伝言は
Con que mi vieja ternura	古い愛情をこめて
De criatura	私の子供っぽい・・・
Te está prestando coraje...	腹立たしさを君に伝えている・・・
Yo, que a lo largo del viaje	私は 旅の長い間ずっと
Sufrí tus ultrajes	君の無礼の数々に苦しんだ
En mi soledad..	私の孤独の中で・・・

と続く。このくだりはディセボロが生前周囲からあまり理解されなかったことを言っているのだろうか？ この後、

Nunca quieras mal
Total, la vida ¡Qué importa!
Si es tan finita y tan corta
Que al fin
El piolín se corta...
No te aflija el esquinazo
Del dolor,
Y si el amor te hace caso,
No le niegues tu pedazo de candor
Que es lindo creerle al amor.
Bueno y nada más
Que siendo bueno
No hay odios, ni injusticia, ni veneno
Que haga mal...

君は決して不幸を望まない
結局 命…それがどうしたと言うんだ！
とても細いにせよ、とても短いにせよ
ついには
その紐は切れてしまう…
君を悲しませはしない、苦悩の街角は…
ある愛が 君を相手にしてくれるなら
君は拒否してはいけない…君の清純な部分で
それは愛を信じる美しさだから
善良さ ただそれだけで
善良でいることだ
憎しみはなく…不正もなく…悪意もなく
不幸を紡ぎだすような

と、命のはかなさに触れ、愛を信じ、ただ善良であれと説く歌詞が続く。そして冒頭の繰り返しのような

Y hoy, que no estoy
Me da pena no estar

そして今日 私はいない
私に苦痛を与える いられないことが

という言葉が現れ、それに

Vos, que me hiciste llorar...
Vos, que eras todo rencor...
Mensaje...
Mensaje con que te digo
Que soy tu amigo
Y tiro el carro contigo...
Yo, tan chiquito y desnudo
Lo mismo te ayudo
Cerquita de Dios...

君は 私を泣かせた
君は 私の恨みのすべてだった
伝言・・・
君へ語ることでの伝言
私は 君のともだちだよと
君と一緒に つらい仕事をしていると・・・
私は・・・とても小さい子供でも丸裸でも
同じように君を助ける
神様のすぐ傍で

が続き、最後に

Yo, tan chiquito y desnudo
Lo mismo te ayudo
Cerquita de Dios...

私は・・・とても小さい子供でも丸裸でも
同じように君を助ける
神様のすぐ傍で・・・

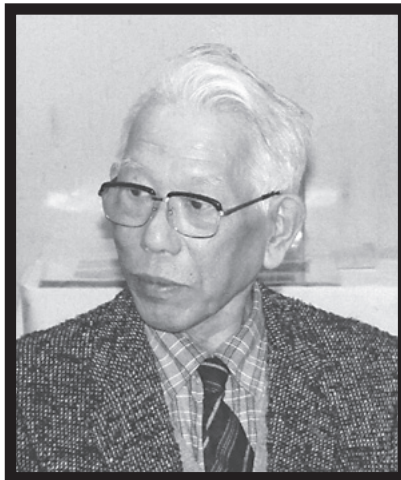
で終わる。後半はかなりキリスト教色の濃い表現である。とは言え「神」を「仏」で置き換えれば仏教徒にも通じるころはある。

スペイン語と日本語とでは語順や文法が大きく異なるので杵築氏の訳詞には苦勞の跡が見られる。そもそもこのような歌詞についてあまり論理的な解釈を求めるのは適當でなく、スペイン語の持つ響きと共に一つ一つ言葉の持つフィーリングを感じ取るべきであろう。この歌詞を眺めると、1920～30年代のタンゴに多く見られるような男女の愛の葛藤や刃傷沙汰をテーマにした歌詞に比べれば、人生を直視したはるかに高踏的な内容であり、ディセポロに共通したテーマである一種の人生論になっている。そこがこの曲が多くの歌手によって取り上げられている所以であろう。それにジューラ ジューラほど厭世的ではない（作詞者が異なるから当然である）。若しディセポロ自身が作詞したのならもっと理屈っぽい、確かに「この人らしい皮肉さ」を含んだ内容になっていたに違いない。しかし実際はそれほどではない。

メンサへの真価は曲想よりもカトゥロ・カスティジョの歌詞にあると筆者は考える。それ故、この曲を本当に味わえる人はスペイン語の歌詞をその音韻も含めて完全に聴き取り、理解できる人に限られる。その意味で筆者は残念ながら完全に埒外である。

上に掲げたメンサへを録音した歌手の中で藤澤嵐子さん（伴奏楽団はオルケスタ・ティピカ東京）（日本ビクター A-5156）とラウル・ベロン（伴奏楽団はアニバル・トロイロ楽団）（TK S 5176）の録音は共に1953年であるが、その他はすべて1960年代後半以降の録音である。ということはメンサへの歌詞がようやくその時代になって人々の理解を得られるようになったということもできる。その意味で殆ど作曲・作詞直後ともいえる1953年にアルゼンチンから遠く離れた日本でこの曲を取り上げた藤澤嵐子さんと早川真平氏の先見性に改めて感服する。

急 告



芝野史郎さん（元当会理事・80歳）が去る10月18日に入院先の病院で亡くなりました。告別式はご家族葬で既に済まされております。取り急ぎお知らせいたします。故人のご冥福をお祈りいたします。

第9回（2012年）

タンゴダンス世界選手権アジア大会決勝を観て

報告：宮本政樹・大澤 寛

7月8日（日）午後、上記アジア大会決勝を観る機会を与えられた。場所は中野駅に近い“なかのZERO”大ホール。なだらかな階段席の正面にステージ。演奏はその後方で行われる。私たちが観たのはサロンとステージ両部門の決勝と表彰式そして観客が客席からステージに上がってのミロンガ。さらに過去の各競技の優勝者やダンス指導者たちによるデモンストレーション。各部門の授賞式の後は再びミロンガ・タイムとなり、ここではアマチュア・タンゴバンドとして健闘を続けるオルケスタ・デ・タンゴ・ワセダが大編成で熱演。続いて標準編成のアウロラが見事なアンサンブルで華を添える。最後は両部門の優勝カップルによる“チャンピオンズ・デモ”で締めくくられた。

審査委員長のJorge Torres氏が「レベルの高いもので審査には苦労した」と述べた通り、決勝の得点表示は僅差であった。各部門の出場カップル数と予選から決勝へ進む過程は下記の通りであった由。

- （サロン部門） 予 選：55組（3曲 x 2回）
準決勝：31組（3曲 x 1回）
決 勝：10組（3曲 x 1回）
（ステージ部門）予 選：20組（1曲 x 2回）
準決勝：10組（1曲 x 1回）
決 勝：6組（1曲 x 1回）

若い人たちの活躍は目覚ましい。町田静子さん（当会会員）の姪御であるNatsukoさんがステージ部門の第7位およびベスト・ドレッサー賞。田中 輝君（当会会員）のペアーがサロン部門の準決勝17位という成績を挙げている。

丁度私たちはサロン部門の決勝10組の踊りから観たのだが、使われたのは“Esta noche de luna” “Café Domínguez” および “Ya lo ves” の3曲。そしてステージ部門6組による決勝で使われたのは出演順に” El recodo” “El andariego” “Quejas de bandoneón” “La cumparsita” “Chacabueando” “Encanto rojo” であった。

臨席の駐日アルゼンチン共和国大使 Raúl Guillermo Dejean 氏の挨拶のあと華やかにサロン部門の二つの特別賞（ベスト・エレガント賞）としての“ベスト・カップル”および“ベスト・ドレッサー”賞が決定。そして順位が6位から順に発表され栄えある優勝は Martín & Yuka のカップルと決まった。ここでの審査委員長の講評要旨は「タンゴダンスはスポーツではない。ペアーの持つ生活の質が反映されなければならない。審査には苦勞した。審査の基準はまず踊りに情感をこめているか、次にペアーが互いに見つめ合い、しっかりとひとつになっているかということに重点を置いた」というものであった。



Martín & Yuka
(提供：ラティーナ)

次いでステージ部門に移り同じく特別賞授与のあと3位から順に発表され栄冠は“La cumparsita”を踊ったPenínsula Cho & Paso Han のペアーに輝いた。得点は50点満点の49.5点。再びTorres 審査委員長から両部門を総括しての講評があった。競技参加者への称賛、主催者・協賛者・関係者へのねぎらいと謝意表明のあと「ステージ・ダンスの基本は演出・組み立てである。振付がすべてではない。情感をどれだけ深く表現できるか。ただ動くだけではいけない。一つ一つの動きに意味が込められているべきだ。ゆっくりした動きでも構わない。ジャンプは必ずしも必要ではない。組んだカップルが男と女の間柄をどのように表現できているかが重要だ」と締めくくった。

最後はそれぞれの部門優勝カップルによる“チャンピオンズ・デモ”。

Martín & Yuka 組は“Café Domínguez”をCho & Han 組はもちろん“La cumparsita”を熱演してこの大会の幕が下りた。

なお指導者・先輩格の人たちのデモンストレーションは Chizuko & Ezequiel と Hiroshi & Kyoko が各1曲、Guillermina & Gaspar と María Blanco & Jorge Torres がそれぞれ2曲ずつであった。

特筆すべきはミロンガ・タイム。客席からは入れ替わり立ち替わり、常に30組ほどがステージに上って、時には音源から時には生演奏でダンスを楽しんでおられたことである。来年以降もさらに充実した楽しい大会が続くものと確信する。

(2012年7月9日記)

「オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ」練習風景見学記

脇田 富水彦・大澤 寛

「東京タンゴ祭2012」出場が決定しているタンゴ・ワセダの練習風景を見学した。練習の妨げになってはいけないのでインタビューなどは行わなかった。18時15分石川晴菜さん（幹事長・担当楽器はバンドネオン）の案内で学生会館地下1階の練習場に入る。天井の高い20畳敷くらいの広さの個室でコンクリートと重い扉で仕切られている。冷房完備。こういう個室がかなり多数あるらしく、会館の受付では3人の大学側の担当者が使用クラブ名・開始終了時間・責任者名などがびっしり書き込まれた大きな表に取り組んでいる。タンゴ・ワセダの練習部屋に入るまでの廊下のあちこちでも様々な楽器やダンスなどの練習風景が見られ、若い熱気を感じた。

タンゴ・ワセダの練習は和気藹々とした楽しそうなもの。三々五々部員が集まって来る。写真撮影は許可されていたので何枚かをここに掲載する。この日私たちが見学していた間のメンバーはバンドネオン4（女性3 男性1）バイオリン6（女性4 男性2）コントラバス2（男女各1）そしてピアノが2人（女性）であった。約1時間



見学した間は、主としてバイオリン・セクションが“Felicia”を小節に区切った練習を重ねていた。そこに時々ピアノ・コントラバス・バンドネオンが小気味よく重なってゆく。バイオリンのリーダー格の女子学生が真剣な眼差しで、しかし楽しそうに短い指示を出して模範演奏をする。我々の位置からは指示の内容は聞き取れないのだが、各パートが楽譜の上にメモをしたり、またそのメモを消しゴムで消したりして、緊張が高まってゆくの判る。

この日は、恐らく入部希望者と思われる男子学生がひとり見学に訪れていて、石川幹事長を始めとする先輩メンバー数人が彼を囲んできわめて熱心に話し込んでいたのも印象に残った。こうして新入部員を確保・増員することで着実に演奏活動を続けて行くのだろう。短時間の見学だったが集中力と団結する気持ちを目の当たりに見せて貰った。タンゴ・ワセダの益々の発展を期待するとともに、皆さまの一層の応援をお願い申し上げたい。

(2012年7月12日記)

第3回「東京タンゴ祭2012」

宮本政樹

「日本のタンゴ人が大集結！」というキャッチフレーズで今年もまた第3回目の東京タンゴ祭が7月14日（日）に浅草公会堂で挙行された。アマとプロ、若手とベテランの演奏家を含めて総勢11楽団によるタンゴの競演である。かつては日比谷公会堂や野外音楽堂でのタンゴフェスティバル、そしてすいよう会が長年主催していた菅平タンゴフェスティバルが年中行事としてタンゴファンを楽しませていたが、タンゴの復活と共にこのようなタンゴ祭も復活したことは喜ばしいことである。三部構成で一楽団3曲から4曲で4時間に亘る長時間の競演でそれぞれ異なる演奏スタイルを聴き比べるのは非常に興味深いものだ。以下出演楽団について記す。

（各演奏者の敬称略）

第一部

<オルケスタ・デ・タンゴ・ワセダ>

交替要員を含めて総勢16名。弦楽器はともかく2、3年の間でバンドネオン陣を一人前に仕上げるにはかなりの練習量と努力の賜物であろう。アンサンブルとしても非常によくまとまっている。古典曲（「オルガニート・デ・ラ・タルデ」、「フェリシア」）よりもピアソラの「スム」のようなモダンタンゴの方が力強い生き生きとしたワセダらしい演奏である。

<ロス・ボジートス>

3回連続出場のアマチュア楽団。さわやかですっきりとした演奏スタイル。仕事をしながらの趣味のタンゴはすばらしい行き方である。ミロンガで活躍しているだけあってノリの良いリズムカルな演奏である。「ボエド」が良かった。

<ギター・ドゥオの智詠&大柴拓>

ほとんどがタンゴ楽団の演奏の中で唯一のギター演奏。二人の調和のとれたコンビネーションは見事である。特に「ロス・マレアードス」のメロディー部分の繊細な音色はしみじみと聴かせる。



智詠と大柴拓

（提供：㈱ラティーナ）

<キサス・タンゴ>

最近成長著しい若手のクアルテート。特にバンドネオン（池田達則）を中心に本場での修行の成果が表れている。「ボエド」「ラ・マリポーサ」の演奏スタイルはコロール・タンゴのアルバレスの影響であろうか。

第二部

<トリオ・ロス・ファンダンゴス>

九州福岡で活躍のタンゴ・トリオ。特に歯切れの良いスピード感あふれるアコーディオン演奏（いわつなおこ）がすばらしい。譜面無しの3人のいかにも楽しそうな演奏ぶりが観客をも乗せてしまう。「ドン・ファン」「ロカ」「ラ・トランペーラ」とミロンガでも楽しく踊れそうな快演である。



トリオ・ロス・ファンダンゴスとケンジ&リリアナ
(提供：🇯🇵ラティーナ)

<シエロ・アデントロ>

社会人が主体の楽団。タンゴではめずらしくチェロが二人も入った弦楽器中心の10人編成のグラン・オルケスタ。オーソドックスな演奏スタイルできれいなアンサンブルにまとめ上げている。デ・カロ、サルガン、フリアン・プラサの選曲は楽団の傾向がうかがえる。

<ピナカス>

仁詩タンゴクアルテートの新楽団。タンゴ以外にもさまざまなジャンルでバンドネオン演奏にチャレンジしている若手の仁詩の演奏もますます磨きがかかっている。カルロス・アギーレ作曲の「ミロンガ・グリス」などの新しいものにも意欲的である。

<京谷弘司クアルテート・タンゴ>

かつてピアソラ自身から「近い将来アストル・ピアソラのライバルとなるコウジ」と評された京谷弘司のタンゴにはピアソラの音楽的要素がかなり影響されている。自作の3部作である「シエンプレ・ア・ブエノスアイレス」、「レコルダシオン」、「プグリッシモ」はピアソラの影響を受けた傑作である。今回の独奏の「モノローグ」は少々難解な曲想ではあるがピアソラ色がかなり強い。「アディオス・ノニーノ」はすばらしい演奏であった。いつもの喜多直毅のバイオリンと異なり会田桃子の激しさが京谷弘司との調和のとれたバランスを保っていた。

第三部

<小松真知子とタンゴ・クリスタル>

常に古典タンゴのスタイルを守りながら現代タンゴの良さを取り入れて行く姿勢には共感が持てる。小松真知子の激しさと静けさの織り成すピアノの奏法が全体のアンサンブルを綺麗にまとめ上げている。それは小松勝のアレンジの良さであろう。「ケフンブローソ」や「失われた小鳥

たち」に新しい試みを感じる。小島りち子の歌も本格的な歌手としてこれからも期待するところである。演奏の冒頭、二日前にベース奏者の松永義孝が亡くなったという知らせがあったが、日本のキチョと言われ永年この楽団の屋台骨を支えてきたのに残念である。彼の「コントラバヘアンド」が懐かしい。最後に一組の踊りがあった。今年のアジア選手権のサロンダンスの部で優勝したマルティン&ユカ。ステージの上で見せるダンスもサロンダンスの方がよりアルゼンチンタンゴらしく、見ていて疲れなくて良い。

<オルケスタ・アウロラ>

現代タンゴを代表する若手の六重奏団。ピアソラの「マロン・イ・アスール」から始まって、会田桃子自作の「水脈をなぞり揺蕩いし白蓮の炎」、青木菜穂子自作の「エル・ワルツ・ベルデ」と続く。演奏技術も高く迫力もあり、斬新さと独特な演奏スタイル。本場のアルゼンチン公演では絶賛を浴びたようであるが、日本ではその自作曲を含めてそのアレンジと演奏スタイルにおいて賛否両論、評価ははっきり別れているようだ。新しいものにチャレンジするには直ぐには受け入れ難い日本的な体質がある。今後の活躍に期待するものである。最後に登場したのが特別ゲストのパブロ・シーグレル。北村聡のバンドネオンとの二重奏。「リベルタンゴ」の演奏は圧巻であった。ジャズ奏法のピアノのタッチの迫力の凄さがタンゴとはまるで違う。ほとんどが即興であろうが、北村聡のバンドネオンの音が消されているような感じさえ受けた。

<西塔祐三とオルケスタ・ティピカ・パンパ>

Bn 5人、バイオリン陣5人、ベースとピアノで総勢12名のグラン・オルケスタはさすがに迫力がある。バンドネオンと弦楽器の調和のとれた快演であるが、ダリエンスとラサリのスタイルの間であろうか。昔に比べると随分と若返った演奏陣であるが、50年以上もダリエンス・スタイルを守り続けているが、若手の演奏家達も時にはプグリエーセの演奏やピアソラものにチャレンジしたいであろう。変えないところがパンパたる所以であろうか。「メタ・フィエロ」「これが王様だ」、「オルガ」と圧倒的な拍手を浴びて、日本では昔から一番人気があるのがやはりダリエンス・スタイルであるのが納得できる。

主催者に望むこと

総勢11の楽団が一堂に会してタンゴ演奏を競演するとは素晴らしい“タンゴの祭典”である。これからも年中行事として是非継続してもらいたいものである。しかしながら11楽団が4時間もかけて演奏しているのに、タンゴ歌手の出演はたったの一人、小島りち子のみで、しかも一曲しかない。あまりにも演奏だけに偏り過ぎているのではないか。「日本のタンゴ人が大集結！」と謳った“タンゴの祭典”にしてはあまりにも寂しすぎる。タンゴの音楽には歌の存在は必要不可欠であり、演奏会ではステージの華としての役割を担っているものである。柚木秀子、前田はるみ、山崎美恵子、中川美亜、ロベルト杉浦、西澤守、SAYACA、香坂優、グローリア・米山、ユリ・アセナ等第一線で活躍している歌手はたくさん存在している。もっと歌手が出演してこそ「タンゴ人の大集結」と言えるであろう。

楽団の演奏にしても3回続けて出演している楽団もあれば、まだ一度も出演していない楽団も

ある。例えば「オルケスタ・プリマベラ」、「チェ・タンゴ」、「エスキーナ・デ・タンゴ」、「セステート・ローサ」、「オルケスタ・ヨコハマ」、「エル・フエジェ」、「エル・タンゴ・ビーボ」、「岩崎宏之とタンゴコスモス」等アマ・プロを含めてそれぞれ素晴らしい演奏活動をしている楽団は非常に多い。有名楽団、人気楽団等楽団選定の基準があるだろうが、年に一度のお祭りである以上いろいろな楽団に出演の機会を与えてしかるべきである。多すぎて時間的に余裕がなければ一日3時間以内にして、二日間に亘って実施することも可能であろう。



(提供：Ⓜラティーナ)

そして最後に、3回の東京タンゴ祭に何故一度も小松亮太の楽団は出演しないのか。近年においてこれほど日本でタンゴが盛んになった原因には小松亮太の活躍が計り知れないものがありタンゴ界に多大な貢献をしてきた。その小松亮太がこのタンゴ祭に一度も出演していないのは不自然でさえ思える。また、例えば日本のタンゴの黄金期の歴史を語る上で重要な1964年に初めて中南米に演奏旅行をした「オルケスタ・ティピカ東京」の演奏家達は志賀清の他にも岡本昭、家野洋一、河内敏昭、柚木秀子等は今もなお現役として活躍しており「タンゴ祭」に「オルケスタ・ティピカ・東京」の名前で登場するのもフェスティバルに一層華を添えるものとして面白い企画になるのではないだろうか。

“El Tango” を聴いて 躍進を続ける若き旗手・小松亮太

大澤 寛

9月8日（土）及び9日（日）の2日間三鷹市芸術文化センター・風のホールで行われたピアソラ没後20周年記念公演「Ryota Komatsu presents “El Tango”」を聴きました。小松亮太の意気込み、プログラム構成の緻密さ、音楽性の高さは言うまでもなく、舞台演出の巧みさ、そして内外から客演の歌手・演奏者を含めると総勢18名に及ぶ共演者を呼び集めることが出来る統率力に深い感銘を受けました。

プログラムの構成は、第2部にボルヘス（Jorge Luis Borges）の詩にピアソラが曲を付けたオペレッタ“El Tango”全曲を置き、そこに繋ぐ第1部7曲のうちの4曲がピアソラ編曲による他人の曲、そしてピアソラ作品をオスバルド・モンテスが編曲した「リベルタンゴ」を加えて、第1部の最後はピアソラ自身の大作「バンドネオン協奏曲」を21分に亘って熱演するというものでした。

この“El tango”にまつわるピアソラとボルヘスの関係について、当日の曲目解説を担当された斎藤充正氏の文章をそのまま借用します。

“かつて師事したアルベルト・ヒナステラから音楽家として文学や絵画、映画など幅広い芸術に目を向けるよう示唆されたピアソラは、文学との融合へ向かう。ニューヨーク時代の1960年3月、舞踏家アナ・イテルマンの依頼により書かれたのが、ホルヘ・ルイス・ボルヘスの散文物語「バラ色の街角の男」（1933年）の音楽化で、原作から言葉が断片的に抜き出されている”（途中省略）“「バラ色の街角の男」は朗読、歌と12人のソリストのための壮大な組曲で、「ロセンド登場」「ロセンドとルハンの女」「リアル登場 / レアルとルハンの女のためのタンゴ」「ミロンガ・ノクトゥルナ」「パイロンゴ」「レアルの死」「エピローグ」の7曲で構成されている（引用者註：本公演の第2部もこの通りの曲順で行われている）。このアルバムには後日談があり、自らが空想の世界に生きるボルヘスは作品完成後、ピアソラの音楽を全否定した。そもそもボルヘスはタンゴという音楽の形式自体を理解しておらず、作品の出来とは無関係だが、結局「エル・タンゴ」はアルバム制作のみで終わり、ステージでまとめて演奏された形跡がない。それだけに今回の公演は大変貴重である” “そして長いスランプを乗り越えたピアソラは1968年、オラシオ・フェレルとのオペリータ「プエノスアイレスのマリア」で劇的な復活を遂げる。そこには「エル・タンゴ」での経験が生かされていたことは言うまでもない”

長い引用になりましたが、斎藤氏のこの曲目解説そのものが貴重な内容です。

当日の公演を大まかに振り返ると、先ずレオナルド・グラナドス (Leonardo Granados 歌手・語り手、NY在住のベネズエラ人) が登場し、昨年3月の関東大災害への見舞いの言葉と、その当時来日して企画していた公演が中止となったこと、さらに急逝された旧知のコントラバス奏者松永孝義氏への哀悼の意が表されました。

- 第1部は ①E. ドナートの「A media luz」
②J.C. コビアンの「Nostalgias」
③ヴィセント・ユーマンス (Visent Youmans) の「Orchids in the moonlight」(月下の蘭)、
④「Libertango」
⑤ヤコブ・ガーデ (Jacob Gade) の「ジェラシー」

そして ⑥ダニエル・アロミアス・ロブレス (Daniel Alomías Robres) の「El condor pasa」(コンドルは飛んで行く)

から ⑦バンドネオン協奏曲へと盛り上がって行くものでした。



レオナルド・グラナドス
©西田 航

演出の工夫の数々は、③でKaZZma とSayaca (当会会員) に英語で歌わせ、⑤では照明を明るくした客席横から近藤久美子をバイオリンを弾きながら登場させ、さらに⑥がピアソラの編曲であることを紹介しつつ“これを聴いて怒る人は怒り、笑う人は笑って下さい”と軽妙な語り口で観客との触れ合いを深めて行きました。さらに客演のレオナルド・ブラーボ (Leonardo Bravo, ギター) を“アコースティックしか弾かない人物にこの舞台ではエレキを弾かせます”と紹介。N響の奏者を招いたハーブの運送料にも触れて“費用のかかっている公演”であることをさらりと匂わせていました。

第2部はいよいよレオナルド・グラナドスが本格的に登場。上に引用した斎藤充正氏の文中にある通りの順序で7つのシーンを明晰な唄と語りにアクションを加えて演じ切り、アンコールは「ロコへのバラード Balada para un loco」を歌ってフィナーレとなりました。

オペレッタ“El Tango”全体を通してステージに乗せるという快挙を、斎藤氏の言葉にある通り、多分世界で初めて成し遂げた小松亮太に喝采を贈りながら、彼が今後も企画し主宰するプロジェクトの数々(来年前半には昨年の大災害で中止となった“ブエノスアイレスのマリア”も予定されている由)が一層の成功を収めることを期待してやみません。

同時に未だマイナーな世界であるタンゴの公演に素晴らしい場所と支援を提供されている主催者・公益財団法人三鷹市芸術文化振興財団に敬意を捧げます。



フィナーレ

©西田 航

(2012年9月9日記)

=映画=

「わたし」の人生 我が命のタンゴ

を観て

佐藤 進



「我が命のタンゴ」というサブタイトルに惹かれてこの映画を観た。タンゴ愛好家としての関心はどんなタンゴが聴かれるかということにあった。

主婦として子育てを終えた長女は、長年の夢だった大学教授への道を歩み始めようとしていた矢先、母が亡くなった直後から父の認知症が発覚する。前頭側頭型認知症と診断された大学名誉教授の父は暴力行為、痴漢行為、万引きなど起こし、警察沙汰のトラブルを繰り返してゆく。手に負えない父の言動や行動から家族のストレスは高じ、家族崩壊の危機になってゆく。

父は家族の勧めで介護施設へデイケアに通い始める。

アルゼンチンでタンゴの勉強をしていた次女は、母の訃報で急遽帰国していたが、父の通う介護施設がリハビリの一環として始めたタンゴ・ダンスのクラスで教え始め、同時に父もタンゴ・ダンスを入居者達と一緒に習うことになる。

最初はおぼつかなかったが、暫くすると踊る楽しさと喜びを覚えていく。そのうち認知症から来るトラブルも少なくなるなど父に変化が表れる。家族の介護負担を軽減するため、父は自宅を売却し介護付高齢者向け住居への入居を決心する。失望のどん底にあった家族に再び笑顔が訪れ、長女は諦めかけていた夢に向かうことを心に誓う。仕事と介護の狭間で苦悩する主人公の長女を秋吉久美子、認知症の父を橋爪功、次女をタンゴ歌手冴木杏奈が演じている。

監督・原案の老年医療の専門家である和田秀樹は、この映画を通じて女性の介護離職を取り上げ、『「わたし」の人生』のタイトル通り、介護に携わる多くの女性が介護ゆえに自らの人生を諦めてしまうのではなく、自らの人生の選択もしてほしいとうたっている。

介護される側にも家族の負担を減らすようそれとなくメッセージを送っている。

映画の中で胸を打たれたシーンは、妻を亡くしたばかりの父がひとり公園のベンチに座り、幸せそうに歩く夫婦の姿を見かけ嗚咽するシーン、万引きした香水を長女に渡し「良い香り見つけたから」と父が娘に見せた感謝の気持ち、そしてハイライトは介護施設のダンス・パーティーで、認知症の父がダンスを踊れない長女をさそい、娘をいたわりながら踊る姿であり、ほろりとなったシーンである。エンディング曲にはルイス・グレビッチ作曲、冴木杏奈作詞で本人の歌う「命のタンゴ」が流れていたのが印象に残った。

タンゴ・ダンスがどんな形にせよ多くの人に普及するということは喜ばしいことであるが、ここでタンゴ・ダンスを踊らない、聴くだけのタンゴ愛好家に立ち返ってみると、タンゴを聴くことは認知症予防に効果があるのだろうかということである。

研究事例などは知らないが、実際にタンゴ愛好家でひどい認知症になりトラブルを起こしたという話は聞かない。

タンゴは認知症予防に効果あるという確信を持って今後も楽しくタンゴを聴くことにしたい。

アルゼンチン旅行記

大久保 江梨 (青梅市)



私は同伴者2名と、5月4日～6月1日で、BsAsへ飛びました。秋の爽やかさと時々雨もあり、過ごし易い季節でした。仕事で行くので二か月前にホテルと航空券を割引価格でネット予約し、乗り換えのアトランタでの待ち時間は6時間もあるデルタ航空でしたが、空港は新しく、入国審査も素早く快適でした。ホテルは中心街から離れたサンテルモ地区、フロリダ通りから南へ続くペルー通りで、運動不足解消に歩く事も可能な範囲。途中で合流者が一人あり、4人がシングルベッド使用で、騒音が聴こえないことが条件でした。自炊設備無しでしたが、スタッフも良く、毎日のタオル交換と掃除、朝食付きでまずまず満足でした。難点はパソコンの使用場所が暗い事、一週間もインターネットが繋がらなかった事と、エアコンとベッドサイドのライトの故障を直ぐに修繕に来なかった事。技術者が不足なのか？何度もフロントに交渉し、インターネット・カフェにも行きましたが、ダメでした。コインランドリーやコンビニの様なキオスコやスーパーも近く、不便はありません。

ただ、ホテル近辺でも夜の外出は一人では危ない感じで、複数で行動しました。ホテル前でタクシーも拾えますし、バス通りでもあり、便利なロケーションでした。現地の様子は、現在の大統領になってからが悪いと耳にしました。公共のバス・地下鉄・列車料金の値上げと、駅や路上の汚れが目立ち、ゴミをあさる人や物乞いする人も見かけ、犯罪も増えているとの事でした。一人で地下鉄にも乗り、バスにも乗りましたが、いつも周りに注意しました。ホテルのフロントが丁寧に地図にマーキングしてくれ、安全を確認しながら行動しました。それでも、タクシーに2回ほど遠回りされ高い料金を支払わされ、流しのタクシーより「ラジオタクシー」がベストです。通りは一方通行なので、分かりやすいのですが、運転手は外人の私達を誤魔化します。また、徒歩でフロリダ通りからペルー通りに入った所で、汚水を掛けられました。物取りの手口だろうとの予備知識があり、走って逃げました。幸い衣服を汚されたのみで済みました。基本的には、自分の身は自分で守る心構えが大切です。フロリダ通りやスイパチャ通り、サンテルモのアンティーク市場が開かれるドレーゴ広場等、観光客が多い場所には、二人一組のポリシアが巡回しています。

同行の観光目的の2名は、現地旅行社の手配でイグアスの滝に行き、私達ダンサー2名はエスクエラヘレッスンを受けて行き充実。エスクエラでは、日



フィリボ氏と筆者

本でも知られた往年のダンサーのフィリボヤガチ・フェルナンデスらと、若手の先鋭的なダンサーが教師で、日程と時間割が掲示されて一律30ペソと安く、フロリダ通りのガレリアの中の裏に有り便利です。タンゴを学びたい方には、教師のレベルが良いのでお勧めです。観光客も一緒にレッスン内容も様々ですが、1～2曲踊ってくれて、こちらのレベルを見た上でレクチャーをしますし、教師を気に入れば、個人レッスンも可能です。ダンスに必要なボディ作りのクラスもあります。また、ミロンガ前にグループレッスンがセットされている所もあり、ミロンガ代金は、30ペソが一般的でレッスン代も含まれます。ミロンガ情報はフロリダ通りの観光案内所や、各ミロンガに置かれている冊子やパンフレットを貰えます。同じ場所でも、オーガナイザーが変わりミロンガ名が変わり、金土日は若者も多く、平日は壮年・老年が多いです。日本と大きく違うアブラソの深い現地スタイルは、初対面の相手からでも心地よいリードを感じられ、音を共有し楽しむ年齢など関係有りません。相手を大切にするのは勿論、会場のマナーを守る意識が感じられ、紳士淑女の優雅さもあります。服装やシューズも、壮・老年の方々の方がお洒落です。ほとんど毎晩、ミロンガはあり、スデルランド、ラ・ナショナル、カニング、グリセール、イデアル、バルドッサ、ラ・ビエルテなど、選曲も良くお勧めです。

昼間のミロンガもありますが、夜10時位に始まり観光客も多く、彼らが帰った遅い時間になるとポルターニョ達が集まり踊り出します。入り口で入場料を払いますが勝手には席に着かず、必ずオーナーが案内してくれますが、予約も出来ます。カベセオをし易くとか、全体のバランスを把握し案内します。ダンスを誘うカベセオは、男性からのみがルールで、踊っている女性を良く観察していて、遠い席からでも近くにきてカベセオします。女性は、日本の様に誰でも踊って貰える訳ではなく、レベルアップしないと見学だけになりかねません。

物価上昇の影響は色々な所で体験しましたが、有名なエルベソも閉り、老舗のイデアルは40ペソは高いと、現地人に不評で私達を含めて10人のみ。シューズをまとめて購入しても割引無し。観光客の持ち込むドルは国が抱え込み、現地人には全く手に入らず、銀行の営業時間を突然変更したり、社会的に混沌としています。観光客で外貨を稼いでいるのでしょうか、?マークばかりが頭に浮かびます。マーケットには新鮮で様々な野菜が溢れていて、ドレッシングも売られてますが、レストランのサラダはどれも同じでレタスと人参とトマト位、味つけはバルサミコとオリーブオイルと塩のみ。肉も魚も焼くかフライか程度で、代表的なアサードも自分好みで塩をふるのみ。日本人の味覚の繊細さを、今更と痛感。一般的に一回の食事代は、観光客が30～150ペソ、現地人は10～30ペソで、1ペソが20～30円位です。エンパナーダは5～8ペソ、水500mlが5ペソ、ビール小瓶7ペソ、ワインはピンキリですが、20ペソ以上ならまあまあです。やはり、現地人が食べる物を探し、惣菜屋の様な店での量り売りもお勧め。路地裏の食堂も、手ごろで一般向けの現地の味が楽しめ、自分の足で探して歩くと楽しいです。タンゴショウを見せる場所も色々有りますが、ディナー付きでガルデル劇場が500ドル、ロホタンゴで370ドル、他の所も同様200～170ドル、全てドル



エスキーナ・ガルデル

払いで、観光客のみが相手です。私達は私の友人ダンサーのお蔭で、特別半額で2か所も楽しむ事が出来ました。来日した事のあ
るモーラ・ゴドイのショーは、80ペソで内容も素晴らしく現地の
人たちで満員御礼状態でした。コロソ劇場も、110ペソで英語と
スペイン語の解説付きツアーがあり、10～15人で回れます。文
化遺産の荘厳な素晴らしさは圧巻です。タンゴを通して訪れる人
には、ボカ地区のカミニートやカフェ・トルトーニも訪ね、街の
建物も寺院やコングレッソも眺め、市場や歴史を刻む古いレスト
ランやカフェやバルで、時の流れの味わいを感じて欲しいです。



どの様にタンゴが生まれ、愛され生きて今に繋がっているのか？タンゴを聴く人、踊る人は、
なぜ？惹かれ、癒され、育まれ、悩まされ、終り無く求めるのでしょうか？タンゴは、自分の人生
のストーリーやドラマを思い起させて、魂を震わせてくれるのかも知れません。それぞれの環境
で、タンゴからエネルギーを貰い、癒されたり前を向けたり、ましてダンスでは、相手から自分
に無いエネルギーも頂いて変化し、お互いを尊重し、より深く求めるのかも知れません。そして
それは、美酒に酔った様にいつまでも浸っていたい感覚で、思いも掛けない自分を発見したり、
想像力が湧いて来ます。究極は、男女のヒストリーでしょうか。聞こえて来る旋律から、それぞ
れが感性を研ぎ澄ませ、魂を震わせる素晴らしい世界だと思います。

私は男女両方を一人で指導するスタイルで仕事をさせて頂いていますが、今回の私の目的の一
つは、アルゼンチン女性ダンサーをパレハに、私が男性ダンサーとしてのレベルアップでした。
恩師リバローラ氏に頼み、彼の個人レッスンの中でスキルアップに努力しました。アルゼンチン
女性の感性と感覚の表現やフォローや間合いを学べ、日本では出来ない貴重な体験でした。また、
ミロンガ前のグループレッスンでも、現地プロの指導ポイントや方法なども学べ、ステップばか
りに偏らず、相手を大切に作るボディやタイミングは勿論、音楽の解釈のレクチャーに納得でし
た。タンゴのスタイルは色々ありますが、自分のスタイル以外を否定するのでは無く、タンゴ音
楽本来のアレンジの自由を認め合える様な柔軟な心で、易しくどなたでも楽しめるダンスを広め
たいと思います。アジア大会も世界大会も盛況に成りましたが、日本のダンス人口はそれほど増
加しているとは思えません。現地ミロンガで聴こえる音源は、ディサルリ、ダリエソ、ブグリ
エーセ、カナロ、ピアジ、フレセド、トロイロ、セステートタンゴ、コロルタンゴ、サッソー
ネ、フェデリコ等。初めて訪問した同伴生徒も、いつもレッスンで聴いて踊っていたので、安心
して楽しめたとの感想です。

私は、日本タンゴ・アカデミーのメンバーに入れて頂き、とても良かったと思います。音源と
して使う曲やオルケスタについて学べ、先輩諸氏の体験談やエピソードを聞かせて頂き、私が知
らない時代のタンゴや、アーティストたちの人間味や時代背景も教えて頂けます。これからも、
勉強させて頂きます。また、タンゴダンスは即興で自由ですので、難しく考えず、メンバーの皆
様にも聴くだけで無く、ダンスも楽しんで頂けるようお誘いさせて頂きたいと思います。ダンス
を通して、また違うタンゴの魅力に出会って頂ける事を信じます。そして若輩の私に、貴重な機
関誌に原稿を書かせて頂きました事を感謝して、ペンを置かせて頂きます。

2012 . 9

書評

タンゴの革命児 没後20年ピアソラ

(モーストリー・クラシック vol.179、2012年4月号)

齋藤 富士郎

雑誌というものは基本的に一過性の媒体であり、バックナンバーは書店では手に入らないのが普通である。しかし、最近ではAmazon.comなどが雑誌のバックナンバーを中古品ではあるが在庫していることもあるようで、実際、私もモーストリー・クラシック誌のここに紹介した号をAmazon.comを通して入手した。私が注文した時点でまだ数点は残っていた。

モーストリー・クラシック誌はその名の通りクラシック音楽愛好家のための雑誌であるが、それがピアソラ特集号を組んだというのは興味深い。と言ってもピアソラに当てられているのは178頁中、67頁、比率にして38%である。特集内容は多岐にわたり、それぞれの記事は2～3頁、多いもので4頁である。

記事はピアソラの生涯をごく簡単にまとめた濱田滋郎「タンゴの革命児 没後20年ピアソラ」に始まり、それに続く「ピアソラ タンゴと音楽を語る」というインタビュー記事ではクラシック音楽を含めたピアソラの音楽観が語られ、興味深い。彼は、北米人の作曲家の中で1人を選ぶならガーシュウィン1人で十分と言っているが、どうしてそう考えるのかが知りたいところである。

齋藤充正による「音楽家ピアソラの生涯」と「ピアソラの傑作10選」は全体で7頁であるが、中々の力作で読み応えがある。その中で彼が『「タンゴといえばピアソラ」というのは本当は正しくない。ピアソラはタンゴとしてのひとつのありようを示したに過ぎない」と言っているのは正鵠を射ていると言えるだろう。また吉村 溪「ピアソラとクラシックの音楽家」と片桐卓也「クラシックの音楽家たちが行った『ピアソラ再発見』」、それに続くギドン・クレーメル「ピアソラを語る」、ヨー・ヨー・マ「ピアソラを語る」はピアソラ音楽とクラシック音楽との関係、クラシック音楽家がピアソラ音楽をどう捉えたかがわかって興味深い記事となっている。クレーメルの「ピアソラにはシューベルトと同様にハッピーな曲がない」という意見にも考えさせられる

各々の記事の分量は少ないけれども、小松亮太 (bn)、ナージャ・サレルノ＝ソレンバーグ (vn)、荘村清志 (g)、須川展也 (sax)、寺井尚子 (jazz.vn)、三浦一馬 (bn)、大萩康司 (g)、パブロ・



シーグレル (p) のインタビュー記事からはピアソラが彼らに与えた影響が読み取れる。

高久 暁「ガーシュウィン、ヒナステラ、プーランジェ ピアソラ3つの出会い」は2頁に過ぎないが、ピアソラとこれら3人との関係が要領よくまとめられている。

前島秀国「ピアソラと映画音楽」では、ピアソラは40本近く上る映画に楽曲を提供しながらも、映画に積極的にかかわることをしなかったことが紹介されている。

齋藤充正「ピアソラに影響を与えた共演者たち ピアソラから影響を受けた共演者たち」は2頁に過ぎないが、要領よくまとめられている。

山尾洋史&山尾恭子「ピアソラは踊りにくい!？」はタンゴ・ダンスの立場からピアソラ音楽を取り上げ、タンゴのリズムは2×4であるが、ピアソラの場合は3・3・2のリズムになっていたりするので、それに合わせてステップを崩す必要がある、ことなどが述べられている。唯、筆者自身はダンスはやらないので、それが具体的にどういうことなのかは筆者の理解の外である。

ピアソラとは直接関係ないが濱田滋郎「タンゴはこうして生まれた ～アルゼンチン・タンゴ小史～」、船津亮平「アルゼンチン 国と歴史、そして今 ～移民国家、ブエノスアイレス、タンゴ～」、三光 洋「パリのアルゼンチンタンゴ」、岩下真好「アルゼンチンのクラシック音楽家」はタンゴ門外漢(=この雑誌の大部分の読者たち)にとって有益であろう。

これもまたピアソラとは関係ないが、この特集の別な場所の「小松亮太 お勧めのタンゴの名盤はこれ!」という記事の中で、小松氏がアルフレド・ゴビの復刻CD (Euro Records, EU-14027) を第1に取り上げ、ゴビについてかなりスペースを割いて述べているのは興味深い。ゴビは日本ではかつては非常に評価が低かったが、近年は次第に評価が高まって来た。小松氏が言うようにゴビはもっと聴かれてよいタンゴ音楽家である。

これらの他にもいろいろと興味深く、有用な記事が掲載されている。

当然ながらこの特集号はタンゴ愛好家を対象とはしていないので、物足りない、食い足りないと感じる点はいくつかあると思うが、ピアソラについてこれだけ要領よくまとめた特集記事は珍しいので、ここに紹介した。



左から、エクトル・デ・ローサス (歌手)、アストル・ピアソラ (bn)、ハイメ・ゴース (p)、エルビーノ・バルダロ (vn)、キーチヨ・ディアス (cb)、オスカル・ロベス・ルイス (g)

La número cinco (背番号5番のシャツ)

(L) Reinaldo Yiso (M) Orestes Cúfaro

ある土曜日の昼下がりに
クラブのサロンでチームの主将に 封筒が一通渡された
封を切り 読んだ主将は胸を打たれる
少し変わったその手紙 青い用紙のその手紙

“あなた方は明日 リーグの大きい試合ですよ
その試合を競技場で観られたら 僕の好きな色
好きなチームのあの色を そこで叫べたら 死んでもいいなあ
だけど それは出来ないんです 僕はここに居るんだから
もう2年ほど前から 僕はこのムニス病院に居るんです
試合はラジオで聴いてます だから僕の好きなチームが勝ってることも
全部知ってます
もしも もしも出来るなら あなた方が明日の試合で使う
あの背番号5番のシャツを 僕に呉れないかなあ
それは僕には 何よりもいい治療法になります
そしてね 死んだお袋だって あの青い空から感謝すると思います
ロベルトって訊いて下さい 僕のベッドは14番です
月曜日に待っています 来て貰えるかどうか判らないけど”

手紙はそこで終わってた
思わず頬に流れる涙 いかつい身体の主将の頬に

次の日 日曜の競技場で聞こえる声は
いいぞそれ行け! 「フィオラヴァンティ」!
そして翌日月曜日 その病院の二号棟 当番医はとても驚いた
そこで見たのは男たち 11人の男たち
そして5番のシャツを抱き 泣いて喜ぶ男の子

歌詞はネットのLetra-Dに出ています。そして入手可能なCDはEUROの“Selección 78 回転”シリーズのAlfredo Gobbi 1949/57とFM TangoのAlfredo Gobbi + Jorge Macielがあります。これも杉山滋一さんのご教示を受けました。

日本タンゴ・アカデミーの行事予定

- ◎関西リンコン 日 時：11月4日（日）12：00
場 所：「サロン・ど・あいり」
- ◎中部リンコン 日 時：11月11日（日）13：30
場 所：「文化の諏訪駅」
- ◎東京リンコン 日 時：11月13日（火）18：30
場 所：「原宿クリスティー」
- ◎セミナー 日 時：12月9日（日）13：30
場 所：「東医健保会館」

編集後記

タンゴ関連イベントを出来るだけ多く記録・報告しようとしているのですが、カバーし切れませんでした。そして今号も投稿を準備頂きながら次号に延ばして頂いた方々と、ご出稿の中にご提供頂いた写真・資料の多くを割愛せざるを得なかったことを深くお詫びします。新連載「東京タンゴ・スポット回想」がスタートしました。「東京リンコン・レポート」（第63回までをTangolandia に掲載）の第64回以降は、関西リンコン・中部リンコンと同じくTangueando en Japón に掲載します。次号の締め切りはTangueando en Japón が11月30日、Tangolandia が2013年3月31日です。皆さまのご出稿をお待ちしております（大澤）

日本タンゴ・アカデミー副機関誌

「Tangolandia」（非売品） 第25号 2012年10月 発行

発 行：日本タンゴ・アカデミー

〒156-0044 東京都世田谷区赤堤2-32-14-104（飯塚方）

電話&FAX 03-3324-1989 E-mail iizuka@kve.biglobe.ne.jp

編 集 部：大澤 寛（編集長）〒162-0051

東京都新宿区西早稲田2-1-23-609

TEL&FAX 03-3208-2247

E-mail hdomingo@bc4.so-net.ne.jp

島崎 長次郎・齋藤 富士郎・弓田 綾子・西川 薫

表紙デザイン：脇田 富水彦